

## 使徒行伝

## 第一章

テオピロよ、わたしは先に第一巻を著わして、イエスが行い、また教えはじめてから、二お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくしるした。

三イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。四そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。五すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によつて、バプテスマを授けられるであらう」。

六さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。七彼らに言われた、「時期や場合、父がご自分の権威によつて定めておられるのであつて、あなたがたの知る限りではない。八ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであらう。九こう言い終ると、

イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。一〇イエスの上つて行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて、二言つた、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上つて行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであらう」。

三それから彼らは、オリブという山を下つてエルサレムに帰つた。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。四彼らは、市内に行つて、その泊まっていた屋上の間にあがつた。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモンとヤコブの子ユダとであつた。五彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。

六そのころ、百二十名ばかりの人々が、一団となつて集まっていたが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立つて言つた、「一六兄弟たちよ、イエスを捕えた者たちの手びきになったユダについては、聖霊がダビデの口をおして預言したその言葉は、成就しなければならなかつた。一七彼はわたしたちの仲間に加えられ、この務を授かつていた者であつた。一八彼は不義の報酬で、ある地

所を手に入れたが、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたがみな流れ出てしまった。二九そして、この事はエルサレムの全住民に知れわたり、そこで、この地所が彼らの国語でアケルダマと呼ばれるようになった。「血の地所」との意である。三〇詩篇に、

『その屋敷は荒れ果てよ、

そこにはひとりも住む者がいなくなれ』

と書いてあり、また

『その職は、ほかの者に取らせよ』

とあるとおりである。三二そういうわけで、主イエスがわたしたちの間にゆききされた期間中、三三すなわち、ヨハネのバプテスマの時から始めて、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとり、わたしたちに加わって主の復活の証人にならねばならない。三三そこで一同は、バルサバと呼ばれ、またの名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立て、三四つて言った、「すべての人の心をご存じである主よ。このふたりのうちのどちらを選んで、三五ユダがこの使徒の職務から落ちて、自分の行くべきところへ行つたそのあとを継がせなさいですか、お示し下さい」。三六それから、ふたりのためにくじを引いたところ、マッテヤに当たったので、この人が十一人の使徒たちに加えられることになった。

第二章 五旬節の日がきて、みんなの者が一

緒に集まっていると、二突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起つてきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。三また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。四すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。

五さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、六この物音に大ぜいの人が集まつてきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあつけに取られた。七そして驚き怪しんで言った、「見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。八それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。九わたしたちの中には、バルテヤ人、メジャヤ人、エラム人もおれば、メソボタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、一〇フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅にきている者、一一ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人もいるのだが、あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか」。二みんなの者は驚き惑って、互に言い合った、「これは、いったい、どういふわけなのだろう」。三しかし、ほかの人たちはあざ笑って、「あの人たちは新しい酒

で酔っているのだ」と言った。日曜日の朝、  
 二四そこで、ペテロが十一人の者と共に立ちあがり、声  
 をあげて人々に語りかけた。

「ユダヤの人たち、ならばにエルサレムに住むすべて  
 のかたがた、どうか、この事を知っていただきたい。わ  
 たしの言うことに耳を傾けていただきたい。二五今は朝  
 の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っ  
 ているように、酒に酔っているのではない。二六そうではな  
 く、これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならな  
 いのである。すなわち、

二七『神がこう仰せになる。  
 終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。』  
 二八そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、  
 若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであらう。

二九その時には、わたしの男女の僕たちにも  
 わたしの霊を注ごう。  
 三〇そして彼らも預言をするであらう。

三一また、上では、天に奇跡を見せ、  
 下では、地にしるしを、  
 三二すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、  
 三三みせるであらう。  
 三四主の大いなる輝かしい日が来る前に、

日はやみに、月は血に変わるであらう。  
 三五そのとき、主の名を呼び求める者は、

三六みな救われるであらう。  
 三七イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きな  
 さい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人  
 イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われ  
 た数々の力あるわざと奇跡としるしにより、神からつ  
 かわされた者であることを、あなたがたに示されたかた  
 であつた。三八このイエスが渡されたのは神の定めた計画  
 と予知とによるのであるが、あなたがたは彼を不法の人  
 人の手で十字架につけて殺した。三九神はこのイエスを死  
 の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。

四〇イエスが死に支配されているはずはなかったからであ  
 る。四一ダビデはイエスについてこう言っている、  
 四二『わたしは常に目の前に主を見た。』  
 四三主は、わたしが動かされないうえ、

四四わたしの右にいて下さるからである。  
 四五わたしは、わたしの心は楽しみ、

四六わたしは、わたしの舌はよろこび歌った。  
 四七また、わたしの肉体もまた、望みに生きるであらう。  
 四八あなたがたは、わたしの魂を黄泉に捨ておくことをせず、  
 四九あなたの聖者が朽ち果てるのを、お許しにならない  
 であらう。



二八 あなたは、いのちの道をわたしに示し、エルの人  
み前にあって、わたしを喜びで満たして下さるであ  
ろう。』

二九 兄弟たちよ、族長ダビデについては、わたしはあなた  
がたにむかって大胆に言うことができる。彼は死んで葬  
られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に  
残っている。三〇 彼は預言者であって、『その子孫のひとり  
を王位につかせよう』と、神が堅く彼に誓われたことを  
認めていたので、三一 キリストの復活をあらかじめ知っ  
て、『彼は黄泉に捨ておかれることがなく、またその肉体  
が朽ち果てることもない』と語ったのである。三二 この  
イエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたち  
は皆その証人なのである。三三 それで、イエスは神の右に  
上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたした  
ちに注がれたのである。このことは、あなたがたが現に  
見聞きしているとおりである。三四 ダビデが天に上ったの  
ではない。彼自身こう言っている、

『主はわが主に仰せになった、マモロヨヘネウお別  
れ。』

三五 あなたの敵をあなたの足台にするまでは、  
わたしの右に座していなさい。』

三六 だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知って  
おくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、  
神は、主またキリストとしてお立てになったのである。』

三七 人々はこれを聞いて、強く心を刺され、ペテロやほ

かの使徒たちに、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうした  
らよいのでしょうか」と言った。三八 すると、ペテロが答  
えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびと  
りが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名に  
よって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなた  
がたは聖霊の賜物を受けるであらう。三九 この約束は、わ  
れらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわち  
あなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、  
与えられているものである。』四〇 ペテロは、ほかになお  
多くの言葉であかしをなし、人々に「この曲った時代か  
ら救われよ」と言って勧めた。四一 そこで、彼の勧めの言  
葉を受け入れた者たちは、バプテスマを受けたが、その  
日、仲間に加わったものが三千人ほどあった。四二 そして  
一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりを  
なし、共にパンをさき、祈をしていた。

四三 みんなの者におそれの念が生じ、多くの奇跡とする  
しとが、使徒たちによって、次々に行われた。四四 信者た  
ちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、四五 資産  
や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与  
えた。四六 そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでを  
なし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとを  
もって、食事を共にし、四七 神をさんびし、すべての人に  
好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲  
間に加えて下さったのである。

## 第三章

一 さて、ペテロとヨハネとが、午後三時の祈のときに宮に上ろうとしていっていると、二 生れながら足のきかない男が、かかえられてきた。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日、「美しの門」と呼ばれる宮の門のところに、置かれていた者である。三 彼は、ペテロとヨハネとが、宮にはいつて行こうとしているのを見て、施しをこうた。四 ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。五 彼は何かもらえるのだろうと期待して、ふたりに注目している。六 ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。七 こう言って彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、八 踊りあがって立ち、歩き出した。九 そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った。九 民衆はみな、彼が歩き回り、また神をさんびしているのを見、「これが宮の「美しの門」のそばにすわって、施しをこうていた者である」と知り、彼の身に起ったことについて、驚き怪しんだ。

二 彼がなおもペテロとヨハネとにつきまといているとき、人々は皆ひどく驚いて、「ソロモンの廊」と呼ばれる柱廊にいた彼らのところに駆け集まってきた。三 ペテロはこれを見て、人々にむかって言った、「イスラエルの人

たちよ、なぜこの事を不思議に思うのか。また、わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見つめているのか。三 アブラハム、イサク、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光を賜ったのであるが、あなたがたは、このイエスを引き渡し、ピラトがゆるすことに決めていたのに、それを彼の面前で拒んだ。四 あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、五 いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である。六 そして、イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである。

七 さて、兄弟たちよ、あなたがたは知らずにあのような事をしたのであり、あなたがたの指導者たちとても同様であったことは、わたしにわかっている。八 神はあらゆる預言者の口をとおして、キリストの受難を予告しておられたが、それをこのように成就なさったのである。九 だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。一〇 それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さ

るためである。三このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった。三モーセは言った、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることは、ことごとく聞きしたがいなさい。三彼に聞きしたがわかない者は、みな民の中から滅ぼし去られるであろう。二四サムエルをはじめ、その後つづいて語ったほどの預言者はみな、この時のことを予告した。二五あなたがたは預言者の子であり、神があなたがたの先祖たちと結ばれた契約の子である。神はアブラハムに対して、『地上の諸民族は、あなたの子孫によって祝福を受けるであろう』と仰せられた。二三神がまずあなたがたのために、その僕を立てて、おつかわしになったのは、あなたがたひとりびとりを、悪から立ちかえらせて、祝福にあずからせるためなのである。

#### 第四章

一彼らが人々にこのように語っているあいだに、祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちが近寄ってきて、二彼らが人々に教を説き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいら立て、三彼らに手をかけて捕え、はや日が暮れていたので、翌朝まで留置しておいた。四しかし、彼らの話を聞いた多くの人たちは信じた。そして、その男の数が五千人ほど

になった。

五明くる日、役人、長老、律法学者たちが、エルサレムに召集された。六大祭司アンナスをはじめ、カヤパ、ヨ

ハネ、アレキサンデル、そのほか大祭司の一族もみな集まった。七そして、そのまん中に使徒たちを立たせて尋問した、「あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によって、このことをしたのか」。八その時、ペテロが聖霊に満たされて言った、「民の役人たち、ならびに長老たちよ、九わたしたちが、きょう、取調べを受けているのは、病人に対してした良いわざについてであり、この人がどうしていやされたかについてであるなら、一〇あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてももらいたい。この人が元氣になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。二このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。三この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。四三一人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思った。そして彼らがイエスと共にいた者であることを認め、五かつ、彼らにいやされた者が



そのそばに立っているのを見ては、まったく返す言葉がなかった。<sup>一五</sup>そこで、ふたりに議会から退場するように命じてから、互に協議をつづけて、<sup>一六</sup>言った、「あの人たちを、どうしたらよからうか。彼らによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全体に知れわたっているのです、否定しようもない。<sup>一七</sup>ただ、これ以上このことが民衆の間にひろまらないように、今後はこの名によって、いっさいだれにも語ってはいけないと、おどしてやるうではないか」。<sup>一八</sup>そこで、ふたりを呼び入れて、イエスの名によって語ることも説くことも、いっさい相成らぬと言いわした。<sup>一九</sup>ペテロとヨハネとは、これに対して言った、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。<sup>二〇</sup>わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」。<sup>二一</sup>そこで、彼らはふたりを更におどしたうえ、ゆるしてやった。みんなの者が、この出来事のために、神をあがめていたので、その人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。<sup>二二</sup>そのしるしによっていやされたのは、四十歳あまりの人であった。

<sup>二三</sup>ふたりはゆるされてから、仲間の者たちのところに帰って、祭司長たちや長老たちが言っていたいっさいのことを報告した。<sup>二四</sup>一同はこれを知ると、口をそろえて、神にむかい声をあげて言った、「天と地と海と、その中のす

べてのものの造りぬしなる主よ。<sup>二五</sup>あなたは、わたしたちの先祖、あなたの僕ダビデの口をとおして、聖霊によつて、こう仰せになりました、

『なぜ、異邦人らは、騒ぎ立ち、

『もろもろの民は、むなししいことを図り、

<sup>二六</sup>地上の王たちは、立ちかまえ、

支配者たちは、党を組んで、

主とそのキリストとに逆らったのか』。

<sup>二七</sup>まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、<sup>二八</sup>み手とみ旨とによつて、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。<sup>二九</sup>主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。<sup>三〇</sup>そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によつて、しるしと奇跡とを行わせて下さい」。<sup>三一</sup>彼らが祈り終えると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した。

<sup>三二</sup>信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。<sup>三三</sup>使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた。<sup>三四</sup>彼らの中

に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持つてゐる人たちは、それを売り、売った物の代金をもつてきて、使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。

三六 クプロ生れのレビ人で、使徒たちにバルナバ（「慰めの子」との意）と呼ばれてゐたヨセフは、三モ自分の所有する畑を売り、その代金をもつてきて、使徒たちの足もとに置いた。

第五章 一とところが、アナニヤという人とその妻サツピラとは共に資産を売ったが、二共謀して、その代金をごまかし、一部だけを持ってきて、使徒たちの足もとに置いた。三そこで、ペテロが言った、「アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。四売らずに残しておけば、あなたのものではあり、売ってしまったも、あなたの自由になったはずではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人を欺いたので、五アナニヤはこの言葉を聞いてゐるうちに、倒れて息が絶えた。このことを伝え聞いた人々は、みな非常なおそれを感じた。六それから、若者たちが立って、その死体を包み、運び出して葬った。

七二時間ばかりたってから、たまたま彼の妻が、この出来事を知らずに、はいつてきた。八そこで、ペテロが彼女にむかつて言った、「あの地所は、これこれの値段で

売ったのか。そのとおりか」。彼女は「そうです、その値段です」と答えた。九ペテロは言った、「あなたがたふたりが、心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか。見よ、あなたの夫を葬った人たちの足が、その門口にきている。あなたも運び出されるであろう」。一〇すると女は、たちまち彼の足もとに倒れて、息が絶えた。そこに若者たちがはいつてきて、女が死んでしまつてゐるのを見、それを運び出してその夫のそばに葬った。二教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた。

三そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手により人々の中で行われた。そして、一同は心を一つにして、ソロモンの廊に集まつてゐた。四ほかの者たちは、だれひとり、その交わりに入らうとはしなかつたが、民衆は彼らを尊敬してゐた。五しかし、主を信じて仲間に加わる者が、男女とも、ますます多くなつてきた。六二つについては、病人を大通りに運び出し、寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであつた。七またエルサレム附近の町々からも、大ぜいの人が、病人や汚れた霊に苦しめられてゐる人たちを引き連れて、集まつてきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやされた。八そこで、大祭司とその仲間の者、すなわち、サドカイ派の人たちが、みな嫉妬の念に満たされて立ちあが



り、一八使徒たちに手をかけて捕え、公共の留置場に入れた。一九ところが夜、主の使が獄の戸を開き、彼ら連れ出して言った、二〇「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい。」三彼らはこれを聞き、夜明けごろ宮にはいつて教えはじめた。

一方では、大祭司とその仲間の者たちが、集まってきて、議会とイスラエル人の長老一同とを召集し、使徒たちを引き出してこさせるために、人を獄につかわした。三そこで、下役どもが行って見ると、使徒たちが獄にいないので、引き返して報告した、三三「獄には、しっかりと錠がかけであり、戸口には、番人が立っていました。ところが、あけて見たら、中にはだれもいませんでした。」三宮守がしらと祭司長たちとは、この報告を聞いて、これは、いったい、どんな事になるのだろうと、あわて惑っていた。三五そこへ、ある人がきて知らせた、「行ってごらんなさい。あなたがたが獄に入れたあの人たちが、宮の庭に立って、民衆を教えています。」三六そこで宮守がしら、下役どもと一緒に出かけ行って、使徒たちを連れてきた。しかし、人々に石で打ち殺されるのを恐れて、手荒なことはせず、三七彼らを連れてきて、議会の中に立たせた。すると、大祭司が問うて、三八「言った、あの名を使って教えるはならないと、きびしく命じておいたではないか。それなのに、なんという事だ。エルサレ

ム中にあなたがたの教を、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人の血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ。」三九これに對して、ペテロをはじめ使徒たちは言った、「人間に従うよりは、神に従うべきである。四〇わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、四一そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の上に上げられたのである。四二わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である。」

四三これを聞いた者たちは、激しい怒りのあまり、使徒たちを殺そうと思った。四四ところが、国民全体に尊敬されていた律法学者ガマリエルというパリサイ人が、議会で立って、使徒たちをしばらくのあいだ外に出すように要求してから、四五一同にむかって言った、「イスラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。四六」先ごろ、チウダが起って、自分を何か偉い者のように言いふらしたため、彼に従った男の数が、四百人ほどもあったが、結局、彼は殺されてしまい、従った者もみな四散して、全く跡方もなくなっている。四七そのうち、人口調査の時に、ガラヤ人ユダが民衆を率いて反乱を起したが、この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった。四八そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人

たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。三しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできない。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない。そこで彼らはその勧告にしたがい、四使徒たちを呼び入れて、むち打ったのち、今後イエスの名によつて語ることは相成らぬと言ひわたして、ゆるしてやった。五使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜びながら、議会から出てきた。六そして、毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき教えた。七宣べ伝えたりした。

## 第六章

一そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた。二そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろくない。三そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たちが七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、四わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることしよう。五この提案は会衆一同の賛成するところとなった。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、

それからピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、およびアンテオケの改宗者ニコラオを選び出して、六使徒たちの前に立たせた。すると、使徒たちは祈つて手を彼らの上においた。

七こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった。

八さて、ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしを行つていた。九すると、いわゆる「リベルテン」の会堂に属する人々、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジアからきた人々などが立つて、ステパノと議論したが、一〇彼は知恵と御霊とで語つてわたので、それに対抗できなかった。二そこで、彼らは人々をそそのかして、「わたしたちは、彼がモーセと神とを汚す言葉を吐くの聞いた」と言わせた。三その上、民衆や長老たちや律法学者たちを煽動し、彼を襲つて捕えさせ、議会にひっぱつてこさせた。四それから、偽りの証人たちを立てて言わせた、「この人は、この聖所と律法とに逆らう言葉を吐いて、どうしても、やめようとはしません。五『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまふだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました。六『議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちやうど天

使の顔のように見えた。

第七 章 「大祭司は「そのとおりか」と尋ねた。

そこで、ステパノが言った、

「兄弟たち、父たちよ、お聞き下さい。わたしたちの

父祖アブラハムが、カランに住む前、まだメソポタミヤ

にいたとき、栄光の神が彼に現れて、仰せになった、

『あなたの土地と親族から離れて、あなたにさし示す地

に行きなさい』。そこで、アブラハムはカルデヤ人の地

を出て、カランに住んだ。そして、彼の父が死んだのち、

神は彼をそこから、今あなたがたの住んでいるこの地に

移住させたが、五そこでは、遺産となるものは何一つ、一

歩の幅の土地すらも、与えられなかった。ただ、その地

を所領として授けようとの約束を、彼と、そして彼には

まだ子がなかったのに、その子孫とに与えられたのであ

る。六神はこう仰せになった、『彼の子孫は他国に身を寄

せるであろう。そして、そこで四百年のあいだ、奴隷に

されて虐待を受けるであろう』。七それから、さらに仰せ

になった、『彼らを奴隷にする国民を、わたしはさばくで

あろう。その後、彼らはそこからのがれ出て、この場所

でわたしを礼拝するであろう』。八そして、神はアブラハ

ムに、割礼の契約をお与えになった。こうして、彼はイ

サクの父となり、これに八日目に割礼を施し、それから、

イサクはヤコブの父となり、ヤコブは十二人の族長たち

の父となった。

族長たちは、ヨセフをねたんで、エジプトに売りとば

した。しかし、神は彼と共にいまして、一〇あらゆる苦難

から彼を救い出し、エジプト王パロの前で恵みを与え、

知恵をあらわさせた。そこで、パロは彼を宰相の任につ

かせ、エジプトならびに王家全体の支配に当らせた。

二時に、エジプトとカナンの全土にわたって、ききん

が起り、大きな苦難が襲ってきて、わたしたちの先祖た

ちは、食物が得られなくなった。三ヤコブは、エジプト

には食糧があると聞いて、初めに先祖たちをつかわした

が、三二回目の時に、ヨセフが兄弟たちに、自分の身

の上を打ち明けたので、彼の親族関係がパロに知れてき

た。四ヨセフは使をやって、父ヤコブと七十五人にのぼ

る親族一同を招いた。五こうして、ヤコブはエジプト

に下り、彼自身も先祖たちもそこで死に、六それから彼

らは、シケムに移されて、かねてアブラハムがいくらか

の金を出してこの地のハモルの子らから買っておいだ墓

に、葬られた。

七神がアブラハムに対して立てられた約束の時期が近

づくにつれ、民はふえてエジプト全土にひろがった。

八やがて、ヨセフのことを知らない別な王が、エジプト

に起った。九この王は、わたしたちの同族に対し策略を

めぐらして、先祖たちを虐待し、その幼な子らを生かし

ておかないように捨てさせた。一〇モーセが生れたのは、

ちようどこのころのことである。彼はまれに見る美し



い子であつた。三か月の間は、父の家で育てられたが、三そののち捨てられたのを、パロの娘が拾ひあげて、自分の子として育てた。三モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があつた。

三四十歳になつた時、モーセは自分の兄弟であるイスラエル人たちのために尽すことを、思い立つた。三四ところが、そのひとりがいじめられているのを見て、これがかばい、虐待されているその人のために、相手のエジプト人を撃つて仕返しをした。三五彼は、自分の手によって神が兄弟たちを救つて下さることを、みんなが悟るものと思つていたが、実際はそれを悟らなかつたのである。三六翌日モーセは、彼らが争ひ合つてるところに現れ、仲裁しようとして言つた、『さて、君たちは兄弟同志ではないか。どうして互に傷つけ合つてゐるのか』。三七すると、仲間をいじめていた者が、モーセを突き飛ばして言つた、『だれが、君をわれわれの支配者や裁判人にしたのか。三八君は、きのう、エジプト人を殺したように、わたしも殺そうと思つてゐるのか』。三九モーセは、この言葉を聞いて逃げ、ミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけた。

三四十十年たつた時、シナイ山の荒野において、御使が柴の燃える炎の中でモーセに現れた。三彼はこの光景を見て不思議に思い、それを見きわめるために近寄つたところ、主の声が聞えてきた、三『わたしは、あなたの先

祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である』。モーセは恐れおののいて、もうそれを見る勇氣もなくなつた。三三すると、主が彼に言われた、『あなたの足から、くつを脱ぎなさい。あなたの立つてゐるこの場所は、聖なる地である。三四わたしは、エジプトにゐるわたしの民が虐待されている有様を確かに見とどけ、その苦悩のうめき声を聞いたので、彼らを救ひ出すために下つてきたのである。さあ、今あなたをエジプトにつかわそう』。

三五こうして、『だれが、君を支配者や裁判人にしたのか』と言つて排斥されたこのモーセを、神は、柴の中で彼に現れた御使の手によつて、支配者、解放者として、おつかわしになつたのである。三六この人が、人々を導き出して、エジプトの地においても、紅海においても、また四十年のあいだ荒野においても、奇跡とするしとを行つたのである。三七この人が、イスラエル人たちに、『神はわたしをお立てになつたように、あなたがたの兄弟たちの中から、ひとりの預言者をお立てになるであらう』と言つたモーセである。三八この人が、シナイ山で、彼に語りかけた御使や先祖たちと共に、荒野における集會にいて、生ける御言葉を授かり、それをあなたがたに伝えたのである。三九ところが、先祖たちは彼に従おうとはせず、かえつて彼を退け、心の中でエジプトにあこがれて、四〇『わたしたちを導いてくれる神々を造つて下さい。わたしたちをエジプトの地から導いてきたあのモーセがど

うなったのか、わかりませんから』とアロンに言った。  
 四二 そのころ、彼らは子牛の像を造り、その偶像に供え物をささげ、自分たちの手で造ったものを祭ってうち興じていた。四三 そこで、神は顔をそむけ、彼らを天の星を拝むままに任せられた。預言者の書にこう書いてあるとお

りである、  
 『イスラエルの家よ、  
 四十年のあいだ荒野にいた時に、  
 いけにえと供え物とを、わたしにささげたことがあつたか。』

四四 あなたがたは、モロクの幕屋やロンバの星の神を、かつぎ回つた。  
 それらは、拜むために自分で造つた偶像に過ぎぬ。  
 だからわたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ、

移してしまふであらう。』

四五 わたしたちの先祖には、荒野にあかしの幕屋があつた。それは、見たままの型にしたがつて造るようにと、モーセに語つたかたのご命令どおりに造つたものである。四六 この幕屋は、わたしたちの先祖が、ヨシユアに率いられ、神によって諸民族を彼らの前から追い払い、その所領をのり取ったときに、そこに持ち込まれ、次々に受け継がれて、ダビデの時代に及んだものである。四七 ダビデは、神の恵みをこうむり、そして、ヤコブの神のために宮を造営したいと願つた。四八 けれども、じっさいに

その宮を建てたのは、ソロモンであつた。四九 しかし、いと高き者は、手で造つた家の内にはお住みにならない。預言者が言っているとおりである、

『主が仰せられる、

『どんな家をわたしのために建てるのか。』  
 五〇 わたしのいこいの場所は、どれか。  
 天はわたしの王座、  
 地はわたしの足台である。

五二 これは皆わたしの手が造つたものではないか。』

五三 ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである。五四 いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかつた預言者が、ひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となつた。五五 あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかつた。』

五六 人々はこれ聞いて、心の底から激しく怒り、ステパノにむかつて、歯ぎしりをした。五七 しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つめてみると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立つておられるのが見えた。五八 そこで、彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立つておいでになるのが見える」と言つた。五九 人々は大声で

叫びながら、耳をおおい、ステパノを目がけて、いっせいに殺到し、五八彼を市外に引き出して、石で打った。これに立ち合つた人たちは、自分の上着を脱いで、サウロという若者の足もとに置いた。五九こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」。六〇そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。

第八章 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。

その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、エダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。二信仰深い人たちはステパノを葬り、彼のために胸を打って、非常に悲しんだ。三ところが、サウロは家々に押し入って、男や女を引きずり出し、次に獄に渡して、教会を荒し回った。

四さて、散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。五ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。六群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。七汚れた霊につかれた多くの人々からは、その霊が大声でわめきながら出て行くし、また、多くの中風をわずらっている者や、足のきかない

者がいやされたからである。八それで、この町では人々が、大変なよろこびかたであつた。

九さて、この町に以前からシモンという人がいた。彼は魔術を行つてサマリヤの人たちを驚かし、自分をさも偉い者のように言いふらしていた。一〇それで、小さい者から大きい者にいたるまで皆、彼について行き、「この人こそは『大能』と呼ばれる神の力である」と言っていた。二彼らがこの人について行つたのは、ながい間その魔術に驚かされていたためであつた。三ところが、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えるに及んで、男も女も信じて、ぞくぞくとバプテスマを受けた。四シモン自身も信じて、バプテスマを受け、それから、引きつづきピリポについて行つた。そして、数々のしるしやめざましい奇跡が行われるのを見て、驚いていた。五エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神の言を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。一五ふたりはサマリヤに下って行って、みんなが聖霊を受けるようにと、彼らのために祈つた。一六それは、彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだだれにも下っていないからである。一七そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた。一八シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、一九「わたしが手をおけばだれにで



も聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい」と言った。二〇そこで、ペテロが彼に言った、「おまえの金は、おまえもろとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなど思っているのか。三〇おまえの心が、神の前に正しくないから、おまえは、どうてい、この事にあずかることができない。三二だから、この悪事を悔いて、主に祈れ。そうすればあるいはそんな思いを心にいだいたことが、ゆるされるかも知れない。三三おまえには、まだ苦い胆汁があり、不義のなわ目がからみついている。それが、わたしにわかつている」。三四シモンはこれ聞いて言った、「仰せのような事が、わたしの身に起らないように、どうぞ、わたしのために主に祈って下さい」。三五使徒たちは力強くあかしをなし、また主の言を語つた後、サマリヤ人の多くの村々に福音を宣べ伝えて、エルサレムに帰った。

二六しかし、主の使がピリポにむかつて言った、「立って南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい」(このガザは、今は荒れはてている)。二七そこで、彼は立つて出かけた。すると、ちようど、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財宝全部を管理していた宦官であるエチオピア人が、礼拝のためエルサレムに上り、二八その帰途についていたところであった。彼は自分の馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいった。二九御霊がピリポに「進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい」

と言った。三〇そこでピリポが駆けて行くと、預言者イザヤの書を読んでいるその人の声が聞えたので、「あなたは、読んでいることが、おわかりですか」と尋ねた。三二彼は「だれかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と答えた。そして、馬車に乗って一緒にすわるようにと、ピリポにすすめた。三三彼が読んでいた聖書の箇所は、これであった。

三四「彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、また、黙々として、毛を刈る者の前に立つ小羊のように、口を開かない。三五彼は、いやしめられて、そのさばきも行われなかった。三六だれが、彼の子孫のことを語ることができようか。彼の命が地上から取り去られてゐるからには」。三七宦官はピリポにむかつて言った、「お尋ねしますが、ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほかの人のことですか」。三八そこでピリポは口を開き、この聖句から説き起して、イエスのことを宣べ伝えた。三九道を進んで行くうちに、水のある所にきたので、宦官が言った、「ここに水があります。わたしがバプテスマを受けるのに、なんのさしかえがありますか」。四〇これに對して、ピリポは、「あなたがまごころから信じるなら、受けてさしつかえはあり

ません」と言った。すると、彼は「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます」と答えた。」三そこで車を止めさせ、ピリポと宦官と、ふたりとも、水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。四ふたりの水から上がると、主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見ることができなかった。宦官はよろこびながら旅をつづけた。五その後、ピリポはアゾトに姿をあらわして、町々をめぐり歩き、いたるところで福音を宣べ伝えて、ついにカイザリヤに着いた。

第九章 「さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずまねながら、大祭司のところに行って、ニダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった。三ところが、道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。四彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。五そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると答があった、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。六さあ立って、町にはいつて行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう。七サウロの同行者たちは物も言えずに立っていて、声だけは聞えたが、だれも見えなかった。八サウロは地から起き上がった。

て目を開いてみたが、何も見えなかった。そこで人々は、彼の手を引いてダマスコへ連れて行った。九彼は三日間、目が見えず、また食べることも飲むこともしなかった。

一〇さて、ダマスコにアナニヤというひとりの弟子がいた。この人に主が幻の中に現れて、「アナニヤよ」とお呼びになった。彼は「主よ、わたしでございます」と答えた。二そこで主が彼に言われた、「立って、『真すぐ』という名の路地に行き、ユダの家でサウロというタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。三彼はアナニヤという人がはいつてきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを、幻で見たのである。四アナニヤは答えた、「主よ、あの人エルサレムで、どんなにひどい事をあなたの聖徒たちにしたかについては、多くの人たちから聞いています。五そして彼はここでも、御名をとどめる者たちをみな捕縛する権を、祭司長たちから得てきているのです。六しかし、主は仰せになった、「さあ、行きなさい。あの方は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。七わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう。八そこでアナニヤは、出かけて行ってその家にはいり、手をサウロの上において言った、「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再

び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです」。二八するとたちどころに、サウロの目から、うるこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった。そこで彼は立ってバプテスマを受け、一九また食事をとって元氣を取りもどした。

サウロは、ダマスコにいた弟子たちと共に数日間を過ごしてから、二〇ただちに諸会堂でイエスのことを宣べ伝え、このイエスこそ神の子であると説きはじめた。三これを聞いた人たちはみな非常に驚いて言った、「あれは、エルサレムでこの名をとる者たちを苦しめた男ではないか。その上ここにやってきたのも、彼らを縛りあげて、祭司長たちのところへひっぱって行くためではなかったか」。三しかし、サウロはますます力が加わり、このイエスがキリストであることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人たちを言い伏せた。

三三相当の日数がたったころ、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をした。三四ところが、その陰謀が彼の知るところとなった。彼らはサウロを殺そうとして、夜昼、町の門を見守っていたのである。三五そこで彼の弟子たちが、夜の間に彼をかごに乗せて、町の城壁づたいにつりおろした。

三六サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に加わろうと努めたが、みんなの者は彼を弟子だとは信じな

いで、恐れていた。三七ところが、バルナバは彼の世話をして使徒たちのところへ連れて行き、途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエスの名で大胆に宣べ伝えた次第を、彼らに説明して聞かせた。三八それ以来、彼は使徒たちの仲間に加わり、エルサレムに入りし、主の名によって大胆に語り、また論じ合った。三九ユダヤ人たちとしばしば語り合い、また論じ合った。しかし、彼らは彼を殺そうとねらっていた。四〇兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れてくだり、タルソへ送り出した。

四一こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方にわたって平安を保ち、基礎がかたまり、主をおそれ、聖霊にはげまされて歩み、次第に信徒の数を増して行った。

四二ペテロは方々をめぐり歩いたが、ルダに住む聖徒たちのところへも下って行った。四三そして、そこで、八年間も床に横たわっているアイネヤという人に会った。この人は中風であった。四四ペテロが彼に言った、「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さるのだ。起きなさい。そして床を取りあげなさい」。すると、彼はただちに起きあがった。四五ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見て、主に帰依した。

四六ヨッパにタビタ（これを訳すと、ドルカス、すなわち、かもしか）という女弟子がいた。数々のよい働きや



施しをしてゐた婦人であつた。三七ところが、そのころ病氣になつて死んだので、人々はそのからだを洗つて、屋上の間に安置した。三八ルダはヨツパに近かつたので、弟子たちはペテロがルダにきてゐると聞き、ふたりの者を彼のもとにやつて、「どうぞ、早くこちらにおいで下さい」と頼んだ。三九そこでペテロは立つて、ふたりの者に連れられてきた。彼が着くとすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそばに寄つてきて、ドルカスが生前つくつた下着や上着の数々を、泣きながら見せるのであつた。四〇ペテロはみんなの者を外に出し、ひざまずいて祈つた。それから死体の方に向いて、「タビタよ、起きなさい」と言つた。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起きなおつた。四一ペテロは彼女に手をかして立たせた。それから、聖徒たちや、やもめたちを呼び入れて、彼女が生きかゝつてゐるのを見せた。四二このことがヨツパ中に知れわたり、多くの人々が主を信じた。四三ペテロは、皮なめしシモンという人の家に泊まり、しばらくの間ヨツパに滞在した。

第一〇章 一さて、カイザリヤにコルネリオという名の人があつた。イタリヤ隊と呼ばれた部隊の百卒長で、二信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしてゐた。三ある日の午後三時ごろ、神の使が彼のところにきて、「コルネリオよ」と呼ぶのを、幻ではっきり見た。四彼は御使を見つめて

いたが、恐ろしくなつて、「主よ、なんでございますか」と言つた。すると御使が言つた、「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられてゐる。五つては今、ヨツパに人をやつて、ペテロと呼ばれるシモンという人を招きなさい。六この人は、海べに家をもつ皮なめしシモンという者の客となつてゐる。七このお告げをした御使が立ち去つたのち、コルネリオは、僕ふたりと、部下の中で信心深い兵卒ひとりとを呼び、八いっさいの事を説明して聞かせ、ヨツパへ送り出した。

九翌日、この三人が旅をつづけて町の近くにきたころ、ペテロは祈をするため屋上にのぼつた。時は昼の十二時ごろであつた。一〇彼は空腹をおぼえて、何か食べたいと思つた。そして、人々が食事の用意をしてゐる間に、夢心地になつた。二すると、天が開け、大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、地上に降りて来るのを見た。三その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいつてゐた。四そして声が彼に聞えてきた、「ペテロよ。立つて、それらをほふつて食べなさい」。五ペテロは言つた、「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」。六すると、声が二度目にかかつてきた、「神がきよめたものを、清くないなどと言つてはならない」。七こんなことが三度もあつてから、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。

「セペテロが、いま見た幻はなんの事だろうかと、ひとり思案にくれていると、ちょうどその時、コルネリオから送られた人たちが、シモンの家を尋ね当てて、その門口に立っていた。『そして声をかけて、『ペテロと呼ばれるシモンというかたが、こちらにお泊まりではございませんか』と尋ねた。』」<sup>二九</sup>ペテロはなおも幻について、思ひめぐらしていると、御霊が言った、「ごらんなさい、三人の人たちが、あなたを尋ねてきている。<sup>三〇</sup>さあ、立て下に降り、ためらわないで、彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのである。」<sup>三一</sup>そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って言った、「わたしがお尋ねのペテロです。どんなご用でおいでになったのですか。」<sup>三二</sup>彼らは答えた、「正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている百卒長コルネリオが、あなたを家に招いてお話を伺うようにとのお告げを、聖なる御使から受けましたので、参りました。」<sup>三三</sup>そこで、ペテロは、彼らを迎えて泊まらせた。

翌日、ペテロは立って、彼らと連れだって出発した。ヨッパの兄弟たち数人も一緒にいった。<sup>三四</sup>その次の日に、一行はカイザリヤに着いた。コルネリオは親族や親しい友人たちを呼び集めて、待っていた。<sup>三五</sup>ペテロがいよいよ到着すると、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝した。<sup>三六</sup>するとペテロは、彼を引き起して言った、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です。」<sup>三七</sup>

それから共に話しながら、へやにはいつて行くと、そこには、すでに大ぜいの人が集まっていた。<sup>三八</sup>ペテロは彼らに言った、「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられていました。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。<sup>三九</sup>お招きにあずかった時、少しもためらわずに参ったのは、そのためなのです。そこで伺います、どういうわけで、わたしを招いてくださったのですか。」<sup>四〇</sup>これに対してコルネリオが答えた、「四日前、ちょうどこの時刻に、わたしが自宅で午後三時の祈をしていましたと、突然、輝いた衣を着た人が、前に立って申しました、<sup>四一</sup>『コルネリオよ、あなたの祈は聞きいれられ、あなたの施しは神のみ前におぼえられている。』<sup>四二</sup>そこでヨッパに人を送ってペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は皮なめしシモンの海沿いの家に泊まっている。』<sup>四三</sup>それで、早速あなたをお呼びしたので、ようこそおいで下さいました。今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです。」

<sup>四四</sup>そこでペテロは口を開いて言った、「神は人をかたよしみないかたで、<sup>四五</sup>神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました。<sup>四六</sup>あなたがたは、神がすべての者の主なるイエス・

キリストによって平和の福音を宣べ伝えて、イスラエルの子らにお送り下さった御言をご存じでしょう。三七それは、ヨハネがバプテスマを説いた後、ガリラヤから始まってエダヤ全土にひろまった福音を述べたものです。三八神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました。三九わたしたちは、イエスがこうしてエダヤ人の地やエルサレムでなさったすべてのことの証人であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。四〇しかし神はイエスを三日目によみがえらせ、四一全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現れるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。四二それから、イエスご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであることを、人々に宣べ伝え、またあかしするようにと、神はわたしたちにお命じになったのです。四三預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしていました。

四四ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たち

は、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。四六それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。そこで、ペテロが言い出した、四七「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこばみ得ようか」。四八こう言って、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペテロに願って、なお数日のあいだ滞在してもらった。

第一一章 「さて、異邦人たちも神の言を受け聞いたということが、使徒たちやエダヤにいる兄弟たちに聞えてきた。二そこでペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を重んじる者たちが彼をとがめて言った、三「あなたは、割礼のない人たちのところに行つて、食事を共にしたということだが」。四そこでペテロは口を開いて、順序正しく説明して言った、五「わたしがヨツバの町で祈っていると、夢心地になって幻を見た。大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、天から降りてきて、わたしのところにとどいた。六注意して見つめていると、地上の四つ足、野の獣、這うもの、空の鳥などが、はいっていた。七それから声がして、『ペテロよ、立つて、それらをほふって食べなさい』と、わたしに言うのが聞えた。八わたしは言った、『主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないものや汚れたものを口に入れたことが



一度もごさいません』。九すると、二度目に天から声がかかってきた、『神がきよめたものを、清くないなどと言つてはならない』。二〇こんなことが三度もあつてから、全部のものがまた天に引き上げられてしまった。二ちようどその時、カイザリヤからつかわされてきた二人の人が、わたしたちの泊まっていた家に着いた。三御霊がわたしに、ためらわずに彼らと共に行けと言つたので、ここにいる六人の兄弟たちも、わたしと一緒に出かけに行き、一同がその人の家にはいった。二三すると彼はわたしたちに、御使が彼の家に現れて、『ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。二四この人は、あなたとあなたの全家族とが救われる言葉を語って下さるであらう』と告げた次第を、話してくれた。二五そこでわたしは語り出したところ、聖霊が、ちようど最初わたしたちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった。二六その時わたしは、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によつてバプテスマを受けるであらう』と仰せになつた言葉を思い出した。二七このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さつたのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになつたとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか。一八人々はこれを聞いて黙つてしまった。それから神をさんびして、『それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになつたのだ』と言つた。

一九さて、ステパノのことで起つた迫害のために散らされた人々は、ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで行つたが、ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語つていなかった。二〇ところが、その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行つてからギリシヤ人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた。二三そして、主のみ手が彼らと共にあつたため、信じて主に帰依するもの数が多かつた。

二三このうわさがエルサレムにある教会に伝わつてきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした。二四彼は、そこに着いて、神のめぐみを見てよろこび、主に對する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました。二五彼は聖霊と信仰とに満ちた立派な人であつたからである。こうして主に加わる人々が、大ぜいになつた。二六そこでバルナバはサウロを捜しにタルソへ出かけて行き、二七彼を見つけたうへ、アンテオケに連れて帰つた。ふたりは、まる一年、ともどもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた。このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった。

二七そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケにくだつてきた。二八その中のひとりであるアガボという者が立つて、世界中に大ききんが起るだろうと、御霊によつて預言したところ、果してそれがクラウド帝の時

に起つた。二九そこで弟子たちは、それぞれの力に依じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに援助を送ることに決めた。三〇そして、それをバルナバとサウロとの手に託して、長老たちに送りどけた。

第一二章 一そのころ、ヘロデ王は教会のある者たちに圧迫の手をのびし、二ヨハネの兄弟ヤコブをつるぎで切り殺した。三そして、それがユダヤ人たちの意になつたのを見て、さらにペテロをも捕えにかかった。それは除酵祭の時のことであつた。四ヘロデはペテロを捕えて獄に投じ、四人一組の兵卒四組に引き渡して、見張りをさせておいた。過越の祭のあとで、彼を民衆の前に引き出すつもりであつたのである。五こうして、ペテロは獄に入れられていた。教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた。

六ヘロデが彼を引き出そうとしていたその夜、ペテロは二重の鎖につながれ、ふたりの兵卒の間に置かれて眠っていた。番兵たちは戸口で獄を見張っていた。七すると、突然、主の使がそばに立ち、光が獄内を照した。そして御使はペテロのわき腹をつついて起し、「早く起きあがりなさい」と言った。すると鎖が彼の両手から、はずれ落ちた。八御使が「帯をしめ、くつをはきなさい」と言ったので、彼はそれとおりにした。それから「上着を着て、ついてきなさい」と言われたので、九ペテロはついて出て行つた。彼には御使のしわざが現実のこととは

考えられず、ただ幻を見ているように思われた。一〇彼らは第一、第二の衛所を通りすぎて、町に抜ける鉄門のところに来ると、それがひとりでに開いたので、そこを出て一つの通路に進んだとたんに、御使は彼を離れ去った。二その時ペテロはわれにかえて言った、「今はじめて、ほんとうのことがわかつた。主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあらゆる災から、わたしを救い出して下さつたのだ」。

三ペテロはこうとわかつてから、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行つた。その家には大ぜいの人が集まつて祈つていた。四彼が門の戸をたたいたところ、ロダという女中が取次ぎに出てきたが、五ペテロの声だとわかると、喜びのあまり、門をあけもしないで家に駆け込み、ペテロが門口に立っていると報告した。六人々は「あなたは気が狂つている」と言つたが、彼女は自分の言うことに間違ひはないと、言い張つた。そこで彼らは「それでは、ペテロの御使だろう」と言つた。七しかし、ペテロが門をたたきつづけるので、彼らがあけると、そこにペテロがいたのを見て驚いた。八ペテロは手を振つて彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さつた次第を説明し、「このことを、ヤコブやほかの兄弟たちに伝えて下さい」と言い残して、どこかほかの所へ出て行つた。

九夜が明けると、兵卒たちの間に、ペテロはいつた

どうなったのだろうと、大へんな騒ぎが起つた。「九」ヘロデはペテロを捜しても見つからないので、番兵たちを取り調べたうえ、彼らを死刑に処するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤにくだって行つて、そこに滞在した。

三〇さて、ツロとシドンとの人々は、ヘロデの怒りに触れていたので、一同うちそろつて王をおとずれ、王の侍従官ブラストに取りいつて、和解かたを依頼した。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。三定められた日に、ヘロデは王服をまといつて王座にすわり、彼らにむかつて演説をした。三集まつた人々は、「これは神の声だ、人間の声ではない」と叫びつづけた。二三するとたちまち、主の使が彼を打つた。神に栄光を帰するこゝとをしなかつたからである。彼は虫にかまれて息が絶えてしまった。

二四こうして、主の言はますます盛んにひろまつて行つた。

二五バルナバとサウロとは、その任務を果たしたのち、マルコと呼ばれていたヨハネを連れて、エルサレムから帰つてきた。

### 第一三章

一さて、アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。二一同が主に礼拝をささげ、断食をして

いると、聖霊が「さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい」と告げた。三そこで一同は、断食と祈をして、手をふたりの上においた後、出発させた。

四ふたりは聖霊に送り出されて、セルキヤにくだり、そこから舟でクプロに渡つた。五そしてサラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言を宣へはじめた。彼らはヨハネを助け手として連れていた。六島全体を巡回して、パボスまで行つたところ、そこでユダヤ人の魔術師、バルイエスというにせ預言者に出会つた。七彼は地方総督セルギオ・パウロのところに出入りをしていた。この総督は賢明な人であつて、バルナバとサウロとを招いて、神の言を聞くとした。八ところが魔術師エルマ（彼の名は「魔術師」との意）は、総督を信仰からそらそうとして、しきりにふたりの邪魔をした。九サウロ、またの名はパウロ、は聖霊に満たされ、彼をにらみつけて「言つた、ああ、あらゆる偽りと邪惡とでかたまつてゐる悪魔の子よ、すべて正しいものの敵よ。主のまつすぐな道を曲げることとを止めないのか。二見よ、主のみ手がおまえの上に及んでゐる。おまえは盲になつて、自分、日の光が見えなくなるのだ。たちまち、かすみとやみとが彼にかつたため、彼は手さぐりしながら、手を引いてくれる人を捜しまわつた。三総督はこの出来事を見て、主の教にすっかり驚き、そして信じた。



二三パウロとその一行は、パボスから船出して、パンフリヤのベルガに渡った。ここでヨハネは一行から身を引いて、エルサレムに帰ってしまった。二四しかしふたりは、ベルガからさらに進んで、ビシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂にはいつて席に着いた。二五律法と預言書の朗読があったのち、会堂司たちが彼らのところに人をつかわして、「兄弟たちよ、もしあなたがたのうち、どなたか、この人々に何か奨励の言葉がありましたら、どうぞお話し下さい」と言わせた。二六そこでパウロが立ちあがり、手を振りながら言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を敬うかたがたよ、お聞き下さい。二七この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び、エジプトの地に滞在中、この民を大いなるものとし、み腕を高くさし上げて、彼らをその地から導き出された。二八そして約四十年にわたって、荒野で彼らをはぐくみ、一九カナンの地では七つの異民族を打ち滅ぼし、その地を彼らに譲り与えられた。三〇それらのことが約四百五十年の年月にわたった。その後、神はさばき人たちをおつかわしになり、預言者サムエルの時に及んだ。三一その時、人々が王を要求したので、神はベニヤミン族の人、キスの子サウロを四十年間、彼らにおつかわしになった。三二それから神はサウロを退け、ダビデを立てて王とされたが、彼についてあかしをして、『わたしはエッサイの子ダビデを見つけた。彼はわたしの心にか

なった人で、わたしの思うところを、ことごとく実行してくれるであろう』と言われた。三三神は約束にしたがつて、このダビデの子孫の中から救主イエスをイスラエルに送られたが、三四そのこられる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に悔改めのバプテスマを、あらかじめ宣べ伝えていた。三五ヨハネはその一生の行程を終ろうとするに当たって言った、『わたしは、あなたがたが考えているような者ではない。しかし、わたしのあとから来るかたがいる。わたしはそのくつを脱がせてあげる値うちもない。』三六兄弟たち、アブラハムの子孫のかたがた、ならびに皆さんの中の神を敬う人たちよ。この救の言葉はわたしたちに送られたのである。三七エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めずに刑に処し、それによって、安息日ごとに読む預言者の言葉が成就した。三八また、なんら死に当る理由が見いだせなかったのに、三九ピラトに強要してイエスを殺してしまった。四〇そして、イエスについて書いてあることを、皆なし遂げてから、人々はイエスを木から取りおろして墓に葬った。四一しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。四二イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日もあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっていて。四三わたしたちは、神が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのである。四四神は、イエスをよみがえらせて、

わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。それは詩篇の第二篇にも、『あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と書いてあるとおりである。

三三また、神がイエスを死人の中からよみがえらせて、いつまでも朽ち果てることのないものとされたことについては、『わたしは、ダビデに約束した確かな聖なる祝福を、あなたがたに授けよう』と言われた。三五だから、ほかの箇所でもこう言っておられる、『あなたの聖者が朽ち果てるようなことは、お許しにならないであろう』。三六事実、ダビデは、その時代の人々に神のみ旨にしたがって仕えたが、やがて眠りにつき、先祖たちの中に加えられて、ついに朽ち果ててしまった。三七しかし、神がよみがえらせたかたは、朽ち果てることがなかったのである。三八だから、兄弟たちよ、この事を承知しておくがよい。すなわち、このイエスによる罪のゆるしの福音が、今やあなたがたに宣べ伝えられている。そして、モーセの律法では義とされることができなかったすべての事について、三九信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである。四〇だから預言者たちの書にかいてある次のようなことが、あなたがたの身に起らないように気をつけなさい。

四一『見よ、侮る者たちよ。驚け、そして滅び去れ。』

わたしは、あなたがたの時代に一つの事をする。

それは、人がどんなに説明して聞かせても、

あなたがたのとうてい信じないような事なのである。』

四二ふたりが会堂を出る時、人々は次の安息日にも、これと同じ話をしてくれるようにと、しきりに願った。四三そして集会が終わってから、大ぜいのエダヤ人や信心深い改宗者たちが、パウロとバルナバとについてきたので、ふたりは、彼らが引きつづき神のめぐみにとどまっているようにと、説きすすめた。

四四次の安息日には、ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。四五するとエダヤ人たちは、その群衆を見てねたましく思い、パウロの語ることに口ぎたな反対した。四六パウロとバルナバとは大胆に語った、「神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。四七主はわたしたちに、こう命じておられる、『わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。』

四八あなたが地の果までも救をもたらすためである。』異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてやまなかった。そして、永遠の命にあずかるように定められていた者は、みな信じた。四九こうして、主の御言はこの地方全体にひろまって行った。五〇ところが、エダヤ人たちは、信心深い貴婦人たちや町の有力者たち

を煽動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出させた。五 ふたりは、彼らに向けて足のちりを払い落して、イコニオムへ行った。三 弟子たちは、ますます喜びと聖霊とに満たされていた。

# 第一 四章

一 ふたりは、イコニオムでも同じようにユダヤ人の会堂にはいつて語った結果、ユダヤ人やギリシヤ人が大ぜい信じた。二 ところが、信じなかったユダヤ人たちは異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対して悪意をいだかせた。三 それにもかかわらず、ふたりは長い期間をそこで過ごして、大胆に主のことを語った。

主は、彼らの手によってしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされた。四 そこで町の人々が二派に分れ、ある人たちはユダヤ人の側につき、ある人たちは使徒の側についた。五 その時、異邦人やユダヤ人が役人たちと一緒に反動運動を起し、使徒たちをはずかしめ、石で打とうとしたので、六 ふたりはそれと気づいて、ルカオニヤの町々、ルステラ、デルベおよびその附近の地へのがれ、七 そこで引きつづき福音を伝えた。

八 ところが、ルステラに足のきかない人が、すわっていた。彼は生れながらの足なえで、歩いた経験が全くなかった。九 この人がパウロの語るのを聞いていたが、パウロは彼をじっと見て、いやされるほどの信仰が彼にあるのを認め、一〇 大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は踊り上がって歩き出した。

二 群衆はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、ルカオニヤの地方語で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ」と叫んだ。三 彼らはバルナバをゼウスと呼び、パウロはおもに語る人なので、彼をヘルメスと呼んだ。四 そして、郊外にあるゼウス神殿の祭司が、群衆と共に、ふたりに犠牲をささげようと思つて、雄牛数頭と花輪とを門前に持ってきた。五 ふたりの使徒バルナバとパウロとは、これを聞いて自分の上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで「五 言った、皆さん、なぜこんな事をするのか。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、福音を説いているものである。一六 神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、一七 それでもご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになつていたのである。一八 こう言つて、ふたりは、やつとこのことで、群衆が自分たちに犠牲をささげるのを、思い止まらせた。一九 ところが、あるユダヤ人たちはアンテオケやイコニオムから押しかけてきて、群衆を仲間に引き入れたうえ、



パウロを石で打ち、死んでしまったと思つて、彼を町の外に引きずり出した。しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいる間に、彼は起きあがつて町にはいつて行つた。そして翌日には、バルナバと一緒にデルベにむかつて出かけた。三その町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後、ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、三弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、「わたしたちが神の国にはいるのは、多くの苦難を経なければならぬ」と語つた。三また教会ごとに彼らのために長老たちを任命し、断食をして祈り、彼らをその信じている主にゆだねた。

二四それから、ふたりはピシデヤを通過してパンフリヤにきたが、二五ペルガで御言を語つた後、アタリヤにくだり、二六そこから舟でアンテオケに帰つた。彼らが今なした終った働きのために、神の祝福を受けて送り出されたのは、このアンテオケからであつた。二七彼らは到着早々、教会の人々を呼び集めて、神が彼らと共にいて下さつた数々のこと、また信仰の門を異邦人に開いて下さつたことなどを、報告した。二八そして、ふたりはしばらくの間、弟子たちと一緒に過ごした。

第一章 さて、ある人たちがユダヤから下つてきて、兄弟たちに「あなたがたも、モーセの慣例にしたがつて割礼を受けなければ、救われない」と、説いてゐた。二そこで、パウロやバルナバと彼らとの間に、少

なからぬ紛糾と争論とが生じたので、パウロ、バルナバそのほか数人の者がエルサレムに上り、使徒たちや長老たちと、この問題について協議することになった。三彼らは教会の人々に見送られ、ピニケ、サマリヤをとつて、道すがら、異邦人たちの改宗の模様をくわしく説明し、すべての兄弟たちを大いに喜ばせた。四エルサレムに着くと、彼らは教会と使徒たち、長老たちに迎えられて、神が彼らと共にいてなされたことを、ことごとく報告した。五ところが、パリサイ派から信仰にはいつてきた人たちが立つて、「異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである」と主張した。

六そこで、使徒たちや長老たちが、この問題について審議するために集まつた。七激しい争論があつた後、ペテロが立つて言つた、「兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになつたのである。八そして、人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わつたと同様に彼らにも賜わつて、彼らに對してあかしをなし、九また、その信仰によつて彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかつた。一〇しかるに、諸君はなぜ今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかつたくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか。二確かに、主イエスのめぐみによつて、われわれは救わ

れるのだと信じるが、彼らとても同様である」。

三すると、全会衆は黙ってしまった。それから、バルナバとパウロとが、彼らをとおして異邦人の間に神が行われた数々のしるしと奇跡のことを、説明するのを聞いた。三ふたりが語り終えた後、ヤコブはそれに応じて述べた、「兄弟たちよ、わたしの意見を聞いていただきたい。二神が初めに異邦人たちを顧みて、その中から御名を負う民を選び出された次第は、シメオンがすでに説明した。二預言者たちの言葉も、それと一致している。すなわち、こう書いてある、

「一六」その後、わたしは帰ってきて、

倒れたダビデの幕屋を建てかえ、

くずれた箇所を修理し、

それを立て直そう。

「一七」残っている人々も、

わたしの名を唱えているすべての異邦人も、

主を尋ね求めるようになるためである。

一八世の初めからこれらの事を知らせておられる主が、

こう仰せになった」。

一九そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人たちに、わずらいをかけてはいけない。二〇ただ、偶像に供えて汚れた物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを、避けるようにと、彼らに書き送ることにしたい。三古い時代から、どの町にもモーセの律法を宣

べ伝える者がいて、安息日ごとにそれを諸会堂で朗読するならわしであるから」。

三そこで、使徒たちや長老たちは、全教会と協議した末、お互の中から人々を選んで、パウロやバルナバと共に、アンテオケに派遣することに決めた。選ばれたのは、バルサバというユダとシラスとであったが、いずれも兄弟たちの間で重んじられていた人たちであった。三この人たちに託された書面はこうである。

「あなたがたの兄弟である使徒および長老たちから、アンテオケ、シリア、キリキヤにいる異邦人の兄弟がたに、あいさつを送る。二四こちらから行ったある者たちが、わたしたちからの指示もないのに、いろいろなことを言つて、あなたがたを騒がせ、あなたがたの心を乱したと伝え聞いた。二五そこで、わたしたちは人々を選んで、愛するバルナバおよびパウロと共に、あなたがたのもとに派遣することに、衆議一決した。二六このふたりは、われらの主イエス・キリストの名のために、その命を投げ出した人々であるが、二七彼らと共に、ユダとシラスとを派遣する次第である。この人たちは、あなたがたに、同じ趣旨のことを、口頭でも伝えるであらう。二八すなわち、聖霊とわたしたちは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたがたに負わせないことに決めた。二九それは、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、避けるということである。これらのものから

遠ざかっておれば、それでよろしい。以上」。

三〇さて、一行は人々に見送られて、アンテオケに下って行き、会衆を集めて、その書面を手渡した。三一人々はそれを読んで、その勧めの言葉をよろこんだ。三二ユダとシラスとは共に預言者であったので、多くの言葉をもつて兄弟たちを励まし、また力づけた。三三ふたりは、しばらくの時を、そこで過ごした後、兄弟たちから、旅の平安を祈られて、見送りを受け、自分らを派遣した人々のところに帰って行った。三四しかし、シラスだけは、引きつづきとどまることにした。三五パウロとバルナバとはアンテオケに滞在をつづけて、ほかの多くの人々と共に、主の言葉を教えかつ宣べ伝えた。

三六幾日かの後、パウロはバルナバに言った、「さあ、前に主の言葉を伝えたすべての町々にいる兄弟たちを、また訪問して、みんながどうしているかを見てこようではないか」。三七そこで、バルナバはマルコというヨハネも一緒に連れて行くつもりでいた。三八しかし、パウロは、前にパンフリヤで一行から離れて、働きを共にしなかったような者は、連れて行かないがよいと考えた。三九こうして激論が起り、その結果ふたりは互に別れ別れになり、バルナバはマルコを連れてクプロに渡って行き、四〇パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。四一そしてパウロは、シリヤ、キリキヤの地方をとおって、諸教会を力づけた。

第一六章 「それから、彼はデルベに行き、次に

ルステラに行った。そこにテモテという名の弟子がいた。信者のユダヤ婦人を母とし、ギリシヤ人を父としており、ニルステラとイコニオムの兄弟たちの間で、評判のよい人物であった。三パウロはこのテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、まず彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることは、みんな知っていたからである。四それから彼らは通る町々で、エルサレムの使徒たちや長老たちの取り決めた事項を守るようにと、人々にそれを渡した。五こうして、諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった。

六それから彼らは、アジャで御言を語ることが聖霊に禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤ地方をとおって行った。七そして、ムシヤのあたりにきてから、ピテニヤに進んで行こうとしたところ、イエスの御霊がこれを許さなかった。八それで、ムシヤを通過して、トロアスに下って行った。九ここで夜、パウロは一つの幻を見た。一〇ひとりのマケドニヤ人が立って、「マケドニヤに渡ってき、わたしたちを助けて下さい」と、彼に懇願するのであった。一〇パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニヤに渡って行くことにした。

二そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモ



トラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。三そこから  
ピリビへ行った。これはマケドニアのこの地方第一の町  
で、植民都市であつた。わたしたちは、この町に数日間  
滞在した。二ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、  
祈り場があると思つて、川のほとりに行った。そして、  
そこにすわり、集まつてきた婦人たちに話をした。四と  
ころが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤと  
いう婦人が聞いていた。主は彼女の心を開いて、パウロ  
の語ることに耳を傾けさせた。五そして、この婦人もそ  
の家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女は  
「もし、わたしを主を信じる者とお思いでしたら、どう  
ぞ、わたしの家に来て泊まつて下さい」と懇望し、し  
てわたしたちをつれて行った。

二ある時、わたしたちが、祈り場に行く途中、占いの  
霊につかれた女奴隷に出会った。彼女は占いをし、そ  
の主人たちに多くの利益を得させていた者である。七こ  
の女が、パウロやわたしたちのあとを追つてきては、「こ  
の人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救  
道を伝えるかただ」と、叫び出すのであつた。八そして、  
そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはて  
て、その霊にむかい「イエス・キリストの名によつて命  
じめる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬  
間に霊が女から出て行った。

一彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶え

たのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡す  
ため広場に引きずつて行った。二それから、ふたりを  
長官たちの前に引き出して訴えた。「この人たちはユダヤ  
人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、三わたし  
たちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣  
伝しているのです。四群衆もいっせいに立つて、ふた  
りを責めたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取  
り、むちで打つことを命じた。五それで、ふたりに何度  
もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にすっかり番  
をするようにと命じた。六獄吏はこの嚴命を受けたので、  
ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしかとか  
けておいた。

五真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さん  
びを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きい  
つていた。六ところが突然、大地震が起つて、獄の土台が  
揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が  
解けてしまった。七獄吏は目をさまし、獄の戸が開いて  
しまつてゐるのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思  
ひ、つるぎを抜いて自殺しかけた。八そこでパウロは大  
声をあげて言った、「自害してはいけな。われわれは皆  
ひとり残らず、ここにゐる。九すると、獄吏は、あか  
りを手に入れた上、獄に駆け込んできて、おののきな  
がらパウロとシラスの前にひれ伏した。一〇それから、ふ  
たりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われ

るために、何をすべきでしようか。三ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。三それから、彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。三彼は真夜中にもかかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そして、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、三さらに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

三夜が明けると、長官たちは警吏らをつかわして、「あの人たちを釈放せよ」と言わせた。三そこで、獄吏はこの言葉をパウロに伝えて言った、「長官たちが、あなたがたを釈放させるようにと、使をよこしました。さあ、出てきて、無事にお帰りなさい」。三七ところが、パウロは警吏らに言った、「彼らは、ローマ人であるわれわれを、裁判にかけもせず、公衆の前で打ち打ったあげく、獄に入れてしまった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするのか。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出すべきである」。三八警吏らはこの言葉を長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人だと聞いて恐れ、三九自分でやってきてわびた上、ふたりを獄から連れ出し、町から立ち去るようにと頼んだ。四〇ふたりは獄を出て、ルデヤの家にいった。そして、兄弟たちに会って勧めをなし、それか

ら出かけた。

## 第一十七章

一行は、アムビポリスとアポロニヤとをとおって、テサロニケに行った。ここにはユダヤ人の会堂があった。ニパウロは例によって、その会堂にはいつて行って、三つの安息日にわたり、聖書に基いて彼らと論じ、三キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと、また「わたしがあなたがたに伝えているこのイエスこそは、キリストである」とのことを、説明もし論証もした。四ある人たちは納得がいて、パウロとシラスにしたがった。その中には、信心深いギリシヤ人が多数あり、貴婦人たちも少なくなかった。五ところが、ユダヤ人たちは、それをねたんで、町をぶらついてゐるならず者らを集めて暴動を起し、町を騒がせた。それからヤソンの家を襲い、ふたりを民衆の前にひっぱり出そうと、しきりに搜した。六しかし、ふたりが見つからないので、ヤソンと兄弟たち数人を、市の当局者のところに引きずって行き、叫んで言った、「天下をかき回してきたこの人たちが、ここにもはいり込んでいます。七その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がゐるなどと言っています」。八これを聞いて、群衆と市の当局者は不安に感じました。九そして、ヤソンやほかの者たちから、保証金を取った上、彼らを釈放した。

「そこで、兄弟たちはただちに、パウロとシラスとを、夜の間にベレヤへ送り出した。ふたりはベレヤに到着すると、ユダヤ人の会堂に行った。ここにいてユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であつて、心から教を受けいれ、果してそのとおりかどうかを知らうとして、日々聖書を調べていた。三そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった。また、ギリシャの貴婦人や男子で信じた者も、少なくなかった。三テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレヤでも神の言を伝えていることを知り、そこにも押しかけてきて、群衆を煽動して騒がせた。四そこで、兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して、海まで行かせ、シラスとテモテとはベレヤに居残った。五パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行き、テモテとシラスとになるべく早く来るようにとのパウロの伝言を受けて、帰った。

六さて、パウロはアテネで彼らを待っている間に、市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた。七そこで彼は、会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた。八また、エピクロス派やストア派の哲学者数人も、パウロと議論を戦わせていたが、その中のある者たちが言った、「このおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほかの者たちは、「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った。パウロが、

イエスと復活とを、宣べ伝えていたからであつた。一九そこで、彼らはパウロをアレオパゴスの評議所に連れて行って、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。二〇君がなんだか珍らしいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りた」と思うのだ」と言った。三三三三、アテネ人もそこに滞在している外国人もみな、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることのみに、時を過ごしていたのである。三そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立つて言った。

「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見てゐる。三三三三、わたしは道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見てゐるうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう。二四この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。二五また、何か不足でもしておるのかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、二六また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。二七こうして、人々が熱心に追い求めて



捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。三八われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、

『われわれも、確かにその子孫である』。

三九このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。四〇神は、このような無知の時代を、これまで見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならぬことを命じておられる。四一神は、義をもつてこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによつてそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである。

四二死人のよみがえりのことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、またある者たちは、「この事については、いづれまた聞くことにする」と言った。四三こうして、パウロは彼らの中から出て行った。四四しかし、彼にしたがつて信じた者も、幾人かあった。その中には、アレオバゴスの裁判人デオヌシオとダマリスという女、また、その他の人々もいた。

第一八章 その後、パウロはアテネを去ってコ

リントへ行った。二そこで、アクラというボント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。三パウロは彼らのところに行つたが、互に同業であつたので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であつた。四パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた。

五シラスとテモテが、マケドニヤから下つてきてからは、パウロは御言を伝えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに力強くあかしした。六しかし、彼らがこれに反抗してのしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらつて、彼らに言った、「あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしには責任がない。今からわたしは異邦人の方に行く」。七こう言つて、彼はそこを去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂と隣り合つていた。八会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信じ、た。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた。九すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた、「恐れるな。語りつづけて、黙っているな。一〇あなたがたには、わたしがいつている。だれもあなたがたを襲つて、危害を加えるようなことはない。

この町には、わたしの民が大ぜいいる。二パウロは一年六か月の間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづけた。

三ところが、ガリオがアカヤの総督であつた時、ユダヤ人たちは一緒になつてパウロを襲ひ、彼を法廷にひっぱつて行つて訴えた、四この人は、律法にそむいて神を拝むように、人々をそそのかしています。五パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人たちに言つた、「ユダヤ人諸君、何か不法行為とか、悪質の犯罪とかのことなら、わたしは当然、諸君の訴えを取り上げもしようが、六これは諸君の言葉や名称や律法に関する問題なのだから、諸君みずから始末するがよからう。わたしはそんな事の裁判人にはなりたくない。七こう言つて、彼らを法廷から追いはらつた。八そこで、みんなの者は、会堂司ソステネを引き捕え、法廷の前で打ちたたいた。ガリオはそれに対して、そ知らぬ顔をしていた。

九さてパウロは、なお幾日もあひだ滞在した後、兄弟たちに別れを告げて、シリヤへ向け出帆した。ブリスキラとアクラも同行した。パウロは、かねてから、ある誓願を立てていたので、ケンクレヤで頭をそつた。一〇一行がエベソに着くと、パウロはふたりをそこに残しておき、自分だけ会堂にはいつて、ユダヤ人たちと論じた。一一人々は、パウロにもつと長いあいだ滞在するように願つたが、彼は聞きいれないで、一二神のみこころなら、

またあなたがたのところへ帰つてこよう」と言つて、別れを告げ、エベソから船出した。一三それから、カイザリヤで上陸してエルサレムに上り、教会にあひさつしてから、アンテオケに下つて行つた。一四そこにしばらくいてから、彼はまた出かけ、ガラテヤおよびフルギヤの地方を歴訪して、すべての弟子たちを力づけた。

一五さて、アレキサンデリヤ生れで、聖書に精通し、しかも、雄弁なアポロというユダヤ人が、エベソにきた。一六この人は主の道に通じており、また、靈に燃えてイエスのことを詳しく語つたり教えたりしていたが、ただヨハネのバプテスマしか知つていなかった。一七彼は会堂で大胆に語り始めた。それをブリスキラとアクラとが聞いて、彼を招きいれ、さらに詳しく神の道を聞き聞かせた。一八それから、アポロがアカヤに渡りたいと思つていたので、兄弟たちは彼を励まし、先方の弟子たちに、彼をよく迎えるようにと、手紙を書き送つた。彼は到着して、すでにめぐみによつて信者になつていた人たちに、大いに力になった。一九彼はイエスがキリストであることを、聖書に基いて示し、公然と、ユダヤ人たちを激しい語調で論破したからである。

第一九章 アポロがコリントにいた時、パウロは奥地をとつてエベソにきた。そして、ある弟子たちに出会つて、二彼らに「あなたがたは、信仰にはいつた時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ、聖

霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。三では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼がきくと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と答えた。四そこで、パウロが言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが、それによって、自分のあとに来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。五人々はこれ聞いて、主イエスの名によるバプテスマを受けた。六そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくんだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した。七その人たちはみんな十二人ほどであった。

八それから、パウロは会堂にはいつて、三か月のあいだ、大胆に神の国について論じ、また勧めをした。九ところろが、ある人たちは心をかたくなにして、信じようとせず、会衆の前でこの道をあしざまに言ったので、彼は弟子たちを引き連れて、その人たちから離れ、ツラノの講堂で毎日論じた。一〇それが二年間も続いたので、アジヤに住んでいる者は、ユダヤ人もギリシヤ人も皆、主の言を聞いた。

二神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次になされた。三たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった。三そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、悪霊につ

かかっている者にむかつて、主イエスの名をとらえ、「パウロの宣べ伝えていいるイエスによって命じる。出て行け」と、ためしに言ってみた。四ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたちも、そんなことをしていた。五すると悪霊がこれに対して言った、「イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」。六そして、悪霊につかれていいる人が、彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した。七このことがエペソに住むすべてのユダヤ人やギリシヤ人に知れわたって、みんな恐怖に襲われ、そして、主イエスの名があがめられた。八また信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した。九それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。一〇このようにして、主の言はますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった。

三これらの事があつた後、パウロは御霊に感じて、マケドニヤ、アカヤをとおつて、エルサレムへ行く決心をした。そして言った、「わたしは、そこに行つたのち、ぜひローマをも見なければならぬ」。三そこで、自分に仕えている者の中から、テモテとエラストとのふたりを、まずマケドニヤに送り出し、パウロ自身は、なおしばらく



くアジアにとどまった。

二三 そのころ、この道について容易ならぬ騒動が起つた。

二四 そのいきさつは、こうである。デメテリオという銀細工人が、銀でアルテミス神殿の模型を造つて、職人たちに少なからぬ利益を得させていた。二五 この男がその職人たちや、同類の仕事をしていた者たちを集めて言った、「諸君、われわれがこの仕事で、金もうけをしていることは、ご承知のとおりだ。二六 しかるに、諸君の見聞きしているように、あのパウロが、手で造られたものは神様ではないなどと言って、エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説きつけて誤らせた。二七 これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれがあるばかりか、大女神アルテミスの宮も軽んじられ、ひいては全アジア、いや全世界が拜んでいるこの大女神のご威光さえも、消えてしまひそうである」。

二八 これを聞くと、人々は怒りに燃え、大声で「大いなるかな、エペソ人のアルテミス」と叫びつづけた。二九 そして、町中が大混乱に陥り、人々はパウロの道連れであるマケドニヤ人ガイオとアリストアルコとを捕えて、いっせいに劇場へなだれ込んだ。三〇 パウロは群衆の中にはいつて行こうとしたが、弟子たちがそれをさせなかつた。三アジャ州の議員で、パウロの友人であつた人たちも、彼に使をよこして、劇場にはいつて行かないようにとしきりに頼んだ。三二 中では、集会が混乱に陥つてしまつ

て、ある者はこのことを、ほかの者はあのかつたことを、どなりつづけていたので、大多数の者は、なんのために集まつたのかも、わからないでいた。三三 そこで、ユダヤ人たちが、前に押し出したアレキサンデルなる者を、群衆の中のある人たちが促したため、彼は手を振つて、人々に弁明を試みようとした。三四 ところが、彼がユダヤ人だとわかると、みんなの者がいつせいに「大いなるかな、エペソ人のアルテミス」と二時間ばかりも叫びつづけた。三五 ついに、市の書記役が群衆を押し静めて言った、「エペソの諸君、エペソ市が大女神アルテミスと、天くだったご神体との守護役であることを知らない者が、ひとりでもいるだろうか。三六 これは否定のできない事実であるから、諸君はよろしく静かにしているべきで、乱暴な行動は、いっさいしてはならない。三七 諸君はこの人たちをここにひっぱってきたが、彼らは宮を荒す者でも、われわれの女神をそしめる者でもない。三八 だから、もしデメテリオなりその職人仲間なりが、だれかに対して訴え事があるなら、裁判の日はあるし、総督もいるのだから、それぞれ訴え出るがよい。三九 しかし、何かもっと要求したい事があれば、それは正式の議会で解決してもらふべきだ。四〇 きょうの事件については、この騒ぎを弁護できるような理由が全くないのだから、われわれは治安をみだす罪に問われるおそれがある」。四一 こう言つて、彼はこの集会を解散させた。

## 第二〇章

「騒ぎがやんだ後、パウロは弟子たちを呼び集めて激励を与えた上、別れのあいさつを述べ、マケドニヤへ向かつて出発した。二そして、その地方をとおる、多くの言葉で人々を励ましたのち、ギリシヤにきた。三彼はそこで三か月を過ごした。それからシリヤへ向かつて、船出しようとしていた矢先、彼に対するユダヤ人の陰謀が起つたので、マケドニヤを経由して帰ることに決した。四プロの子であるベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストタルコとセクンド、デルベ人ガイオ、それからテモテ、またアジア人テキコとトロピモがパウロの同行者であった。五この人たちは先発して、トロアスでわたしたちを待っていた。六わたしたちは、除酵祭が終つたのちに、ピリビから出帆し、五日かかってトロアスに到着して、彼らと落ち合い、そこに七日間滞在した。

七週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まつた時、パウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語りつづけた。八わたしたちが集まつていた屋上の間には、あかりがたくさんともしてあった。九ユテコという若者が窓に腰をかけていたところ、パウロの話がなが々と続くので、ひどく眠けがさしてきて、とうとうぐっすり寝入ってしまった。三階から下に落ちた。抱き起してみたら、もう死んでいた。そこでパウロは降りてきて、若者の上に身をかがめ、

彼を抱きあげて、「騒ぐことはない。まだ命がある」と言った。二そして、また上がつて行って、パンをさいて食べてから、明けがたまで長いあいだ人々と語り合つて、ついに出発した。三人々は生きかえった若者を連れかえり、ひとかたならず慰められた。三さて、わたしたちは先に舟に乗り込み、アソスへ向かつて出帆した。そこからパウロを舟に乗せて行くことにしていた。彼だけは陸路をとることに決めていたからである。四パウロがアソスで、わたしたちと落ち合った時、わたしたちは彼を舟に乗せてミテレネに行った。五そこから出帆して、翌日キヨスの沖合にいたり、次の日にサモスに寄り、その翌日ミレトに着いた。六それは、パウロがアジアで時間をとられなかったため、エペソには寄らないで続航することに決めていたからである。彼は、できればペンテコステの日には、エルサレムに着いていたかったので、旅を急いだわけである。七そこでパウロは、ミレトからエペソに使をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。八そして、彼のところに寄り集まつてきた時、彼らに言った。「わたしが、アジアの地に足を踏み入れた最初の日以來、いつもあなたがたとどんなふうに通じてきたか、よくご存じである。九すなわち、謙遜の限りをつくし、涙を流し、ユダヤ人の陰謀によつてわたしの身に及んだ数数の試練の中にあつて、主に仕えてきた。二また、あな

たがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、ミューダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである。三今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く。あの都で、どんな事がわたしの身にふりかかって来るか、わたしにはわからない。三ただ、聖霊が至るところの町々で、わたしにはっきり告げているのは、投獄と患難とが、わたしを待ちうけているということだ。三しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。三わたしはいま信じている、あなたがたの間を歩き回って御国を宣べ伝えたこのわたしの顔を、みんなが今後二度と見ることはあるまい。三だから、きょう、この日にあなたがたに断言しておく。わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない。三神の旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたからである。三どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。三わたしは去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すよ

うになることを、わたしは知っている。三また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。三だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。三今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。三わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。三あなたがた自身が知っているとおおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。三わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。三

三六こう言つて、パウロは一同と共にひざまずいて祈つた。三みんなの者は、はげしく泣き悲しみ、パウロの首を抱いて、幾度も接吻し、三もう二度と自分の顔を見ることはあるまいと彼が言ったので、特に心を痛めた。それから彼を舟まで見送った。

第二一章 さて、わたしたちは人々と別れて船出してから、コスに直航し、次の日はロドスに、そこか



らパタラに着いた。そこでピネケ行きの舟を見つけたので、それに乗り込んで出帆した。三やがてクプロが見えてきたが、それを左手にして通りすぎ、シリヤへ航行をつづけ、ツロに入港した。ここで積荷が陸揚げされることになっていたのである。四わたしたちは、弟子たちを捜し出して、そこに七日間泊まった。ところが彼らは、御霊の示しを受けて、エルサレムには上って行かないようにと、しきりにパウロに注意した。五しかし、滞在期間が終った時、わたしたちはまた旅立つことにしたので、みんなの者は、妻や子供を引き連れて、町はずれまで、わたしたちを見送りにきてくれた。そこで、共に海岸にひざまずいて祈り、六互に別れを告げた。それから、わたしたちは舟に乗り込み、彼らはそれぞれ自分の家に帰った。

七わたしたちは、ツロからの航行を終ってトレマイに着き、その兄弟たちにあいさつをし、彼らのところに一日滞在した。八翌日そこをたつて、カイザリヤに着き、かの七人のひとりである伝道者ピリポの家にいき、そこに泊まった。九この人に四人の娘があつたが、いずれも処女であつて、預言をしていた。一〇幾日か滞在している間に、アガボという預言者がユダヤから下ってきた。二そして、わたしたちのところにきて、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛つて言った、「聖霊がこうお告げになつてゐる、『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちがエル

サレムでこのように縛つて、異邦人の手に渡すであらう』。三わたしたちはこれを聞いて、土地の人たちと一緒になつて、エルサレムには上って行かないようにと、パウロに願ひ続けた。四その時パウロは答えた、「あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いつたい、どうしようとするのか。わたしは、主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しているのだ。五こうして、パウロが勧告を聞きいれてくれないので、わたしたちは「主のみこころが行われますように」と言っただけで、それ以上、何も言わなかつた。

六数日後、わたしたちは旅装を整えてエルサレムへ上つて行つた。七カイザリヤの弟子たちも数人、わたしたちと同行して、古くからの弟子であるクプロ人マナソンの家に案内してくれた。わたしたちはその家に泊まることになつていたのである。

八わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。九翌日パウロはわたしたちを連れて、ヤコブを訪問しに行つた。そこに長老たちがみな集まつてゐた。一〇パウロは彼らにあいさつをした後、神が自分の働きをとおして、異邦人の間になさつた事どもを一つ説明した。一一一同はこれを聞いて神をほめたたえ、そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になつた者が、数万にものぼつてゐるが、み

んな律法に熱心な人たちである。三ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなど言つて、モーセにそむくことを教えている、ということである。三三どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきつと聞き込むに違いない。三三については、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。三四この人たちを連れて行つて、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされてゐることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守つて、正しい生活をしてゐることが、みんなにわかるであらう。三五異邦人で信者になつた人たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、慎むようにとの決議が、わたしたちから知らせてある。三六そこでパウロは、その次の日に四人の者を連れて、彼らと共にきよめを受けてから宮にはいった。そしてきよめの期間が終つて、ひとりびとりのために供え物をささげる時を報告しておいた。

三七七日の期間が終ろうとしていた時、アジャからきたユダヤ人たちが、宮の内でパウロを見かけて、群衆全体を煽動しはじめ、パウロに手をかけて叫び立てた、三八「イスラエルの人々よ、加勢にきてくれ。この人は、いたる

ところで民と律法とこの場所にそむくことを、みんなに教えている。その上に、ギリシヤ人を宮の内に連れ込んで、この神聖な場所を汚したのだ。三九彼らは、前にエペソ人トロピモが、パウロと一緒に町を歩いてゐたのを見かけて、その人をパウロが宮の内に連れ込んだのだと思つたのである。四〇そこで、市全体が騒ぎ出し、民衆が駆け集まつてきて、パウロを捕え、宮の外に引きずり出した。そして、すぐそのあとに宮の門が閉ざされた。

四一彼らがパウロを殺そうとしていた時に、エルサレム全体が混乱状態に陥つてゐるとの情報が、守備隊の千卒長にとどいた。四二そこで、彼はさっそく、兵卒や百卒長たちを率いて、その場に駆けつけた。人々は千卒長や兵卒たちを見て、パウロを打ちたたくのをやめた。四三千卒長は近寄つてきてパウロを捕え、彼を二重の鎖で縛つておくように命じた上、パウロは何者か、また何をしたのかと尋ねた。四四しかし、群衆がそれぞれ違ったことを叫びつづけるため、騒がしくて、確かなことがわからないので、彼はパウロを兵営に連れて行くように命じた。四五パウロが階段にさしかかった時には、群衆の暴行を避けるため、兵卒たちにかつがれて行くという始末であつた。

四六大ぜいの民衆が「あれをやつつけてしまえ」と叫びながら、ついてきたからである。

四七パウロが兵営の中に連れて行かれようとした時、千卒長に、「ひと言あなたにお話してもよろしいですか」と

尋ねると、千卒長が言った、「おまえはギリシヤ語が話せるのか。三八では、もしかおまえは、先ごろ反乱を起した後、四千人の刺客を引き連れて荒野へ逃げて行ったあのエジプト人ではないのか」。三九パウロは答えた、「わたしはタルソ生れのユダヤ人で、キリキヤのれっきとした都市の市民です。お願いですが、民衆に話をさせて下さい」。四〇千卒長が許してくれたので、パウロは階段の上に立ち、民衆にむかって手を振った。すると、一同がすっかり静粛になったので、パウロはヘブル語で話し出した。

第二二章 「兄弟たち、父たちよ、いま申し上げ

るわたしの弁明を聞いていただきたい。ニパウロが、ヘブル語でこう語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった。三そこで彼は言葉をいつで言った、「わたしはキリキヤのタルソで生れたユダヤ人であるが、この都で育てられ、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きびしい薫陶を受け、今日の皆さんと同じく神に対して熱心な者であった。四そして、この道を迫害し、男であれ女であれ、縛りあげて獄に投じ、彼らを死に至らせた。五このことは、大祭司も長老たち一同も、証明するところである。さらにわたしは、この人たちからダマスコの同志たちへあてた手紙をもらって、その地にいる者たちを縛りあげ、エルサレムにひっぱってきて、処罰するため、出かけて行った。

六旅をつづけてダマスコの近くにきた時に、真昼ごろ、突然、つよい光が天からわたしをめぐり照した。七わたしは地に倒れた。そして、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と、呼びかける声を聞いた。八これに對してわたしは、『主よ、あなたはどなたですか』と言った。すると、その声が、『わたしは、あなたが迫害しているナザレ人イエスである』と答えた。九わたしと一緒にいた者たちは、その光は見たが、わたしに語りかけたかたの声は聞かなかった。一〇わたしが『主よ、わたしは何をしたらいでしようか』と尋ねたところ、主は言われた、『起きあがってダマスコに行きなさい。そうすれば、あなたがするように決めてある事が、すべてそこで告げられるであろう。』一わたしは、光の輝きで目がくらみ、何も見えなくなっていたので、連れの者たちに手を引かれながら、ダマスコに行った。二三すると、律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判のよいアナニヤという人が、一三わたしのところに来て、そばに立ち、『兄弟サウロよ、見えるようになりなさい』と言った。するとその瞬間に、わたしの目が開いて、彼の姿が見えた。一四彼は言った、『わたしたちの先祖の神が、あなたを選んでみ旨を知らせ、かの義人を見させ、その口から声をお聞かせになった。一五それはあなたが、その見聞きした事につき、すべての人に対して、彼の証人になるためである。一六そこで今、なんのためら



うことがあるうか。すぐ立つて、み名をとなえてバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落しなさい。』

二七それからわたしは、エルサレムに帰って宮で祈っているうちに、夢うつつになり、二八主にまみえたが、主は言われた、『急いで、すぐにエルサレムを出て行きなさい。わたしについてのあなたのあかしを、人々が受けられないから。』二九そこで、わたしが言った、『主よ、彼らは、わたしがいたるところの会堂で、あなたを信じる人を獄に投じたり、むち打ったりしていたことを、知っています。』三〇また、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち合っていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていたのです。』三すると、主がわたしに言われた、『行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ。』

三二彼の言葉をここまで聞いていた人々は、このとき声を張りあげて言った、『こんな男は地上から取り除いてしまえ。生かしておくべきではない。』三三人々がこうわめき立てて、空中に上着を投げ、ちりをまき散らす始末であつたので、三四千卒長はパウロを兵營に引き入れるように命じ、どういうわけで、彼に対してこんなにわめき立てているのかを確かめるため、彼をむちの拷問にかけて、取り調べるように言いわたした。三五彼らがむちを当てるため、彼を縛りつけていた時、パウロはそばに立っている百卒長に言った、『ローマの市民たる者を、裁判にかけ

もしないで、むち打ってよいのか。』三六百卒長はこれを聞き、千卒長のところに行つて報告し、そして言った、『どうなさいますか。あの人はローマの市民なのです。』三七そこで、千卒長がパウロのところにきて言った、『わたしに言ってくれ。あなたはローマの市民なのか。』パウロは、『そうです』と言った。三八これに対して千卒長が言った、『わたしはこの市民権を、多額の金で買い取つたのだ。』するとパウロは言った、『わたしは生れながらの市民です。』三九そこで、パウロを取り調べようとしていた人たちは、ただちに彼から身を引いた。千卒長も、パウロがローマの市民であること、また、そういう人を縛っていたことがわかつて、恐れた。

四〇翌日、彼は、ユダヤ人がなぜパウロを訴え出たのか、その真相を知ろうと思つて彼を解いてやり、同時に祭司長たちと全議会とを召集させ、そこに彼を引き出して、彼らの前に立たせた。

第二章 パウロは議会を見つめて言った、『兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがつて行動してきた。』三すると、大祭司アナニヤが、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた。三そのとき、パウロはアナニヤにむかつて言った、『白く塗られた壁よ、神があなたを打つてあるう。あなたは、律法にしたがつて、わたしをさばくために座についているのに、律法にそむいて、わたしを

打つことを命じるのか」。すると、そばに立っている者たちが言った、「神の大祭司に対して無礼なことを言うのか」。パウロは言った、「兄弟たちよ、彼が大祭司だとは知らなかった。聖書に『民のかしらを悪く言ってはいけない』と、書いてあるのだった」。

パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、「兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである」。彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆が相分れた。元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。そこで、大騒ぎとなった。パリサイ派のある律法学者たちが立って、強く主張して言った、「われわれは、この人には何も悪いことがないと思う。あるいは、霊か天使かが、彼に告げたのかも知れない」。こうして、争論が激しくなったので、千卒長は、パウロが彼らに引き裂かれるのを気づかって、兵卒ともに、降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて来るように、命じた。二その夜、主がパウロに臨んで言われた、「しっかりとせよ。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない」。

三夜が明けると、ユダヤ人らは申し合わせをして、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、誓い合った。四この陰謀に加わった者は、四十人あまりであった。五彼らは、祭司長たちや長老たちのところに行つて、こう言った。「われわれは、パウロを殺すまでは何も食べないと、堅く誓い合いました。五ついては、あなたがたは議会と組んで、彼のことでお詳しく取調べをするように見せかけ、パウロをあなたがたのところに連れ出すように、千卒長に頼んで下さい。われわれとしては、パウロがそこにこないうちに殺してしまふ手はずをしています」。

六ところが、パウロの姉妹の子が、この待伏せのことを耳にし、兵営にはいつて行つて、パウロにそれを知らせた。七そこでパウロは、百卒長のひとりを呼んで言った、「この若者を千卒長のところに連れて行つてくださ。何か報告することがあるようですから」。八この百卒長は若者を連れて行き、千卒長に引きあわせて言った、「囚人のパウロが、この若者があなたに話したいことがあるので、あなたのところに連れて行つてくれるようにと、わたしを呼んで頼みました」。九そこで千卒長は、若者の手を取り、人のいないところへ連れて行つて尋ねた。「わたしに話したいことというのは、何か」。一〇若者が言った、「ユダヤ人たちが、パウロのことをもっと詳しく取調べをするの見せかけて、あす議会に彼を連れ出すよ

うに、あなたに頼むことに決めています。三どうぞ、彼らの頼みを取り上げないで下さい。四十人あまりの者が、パウロを待伏せしているのです。彼らは、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、堅く誓い合っています。そして、いま手はずをととのえて、あなたの許可を待っているところなのです。三そこで千卒長は、「このことをわたしに知らせたことは、だれにも口外するな」と命じて、若者を帰した。

三それから彼は、百卒長ふたりを呼んで言った、「歩兵二百名、騎兵七十名、槍兵二百名を、カイザリヤに向け出發できるように、今夜九時までに用意せよ。二四また、パウロを乗せるために馬を用意して、彼を総督ペリクスのもとへ無事に連れて行け」。二五さらに彼は、次のような文面の手紙を書いた。二六「クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下の平安を祈ります。二七本人のパウロが、ユダヤ人らに捕えられ、まさに殺されようとしていたのを、彼のローマ市民であることを知ったので、わたしは兵卒たちを率いて行って、彼を救い出しました。二八それから、彼が訴えられた理由を知ろうと思い、彼を議會に連れて行きました。二九ところが、彼はユダヤ人の律法の問題で訴えられたものであり、なんら死刑または投獄に当る罪のないことがわかりました。三〇しかし、この人に対して陰謀がめぐらされているとの報告がありましたので、わたしは取りあえず、彼を閣下のもとにお送

りすることにし、訴える者たちには、閣下の前で、彼に対する申立てをするようにと、命じておきました」。

三そこで歩兵たちは、命じられたとおりパウロを引き取って、夜の間にアンテパトリスまで連れて行き、三翌日は、騎兵たちにパウロを護送させることにして、兵營に帰って行った。三三騎兵たちは、カイザリヤに着くと、手紙を総督に手渡し、さらにパウロを彼に引きあわせた。三四総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かと尋ね、キリキヤの出だと知って、三五「訴え人たちがきた時に、おまえを調べることにする」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

第二四章 五日の後、大祭司アナニヤは、長老数名と、テルトロという弁護人とを連れて下り、総督にパウロを訴え出た。二パウロが呼び出されたので、テルトロは論告を始めた。

「ペリクス閣下、わたしたちが、閣下のお陰でじゅうぶんに平和を楽しみ、またこの国が、ご配慮によって、三あらゆる方面に、またいたるところで改善されていることは、わたしたちの感謝してやまないところであります。四しかし、ご迷惑をかけないように、くどくどと述べずに、手短かに申し上げますから、どうぞ、忍んでお聞き取りのほど、お願いいたします。五さて、この男は、疫病のような人間で、世界中のすべてのユダヤ人の中に騒ぎを起している者であり、また、ナザレ人らの異端のか



しらであります。六この者が宮までも汚そうとしていたので、わたしたちは彼を捕縛したのです。「そして、律法にしたがって、さばこうとしていたところ、七千卒長ルシヤが干渉して、彼を無理にわたしたちの手から引き離してしまい、八彼を訴えた人たちには、閣下のところに来るようにと命じました。」それで、閣下ご自身でお調べになれば、わたしたちが彼を訴えた理由が、全部おわかりになるでしょう。九ユダヤ人たちも、この訴えに同調して、全くそのとおりだと言った。一〇そこで、総督が合図をして発言を促したので、パウロは答弁して言った。

「閣下が、多年にわたり、この国民の裁判をつかさどっておられることを、よく承知していますので、わたしは喜んで、自分のことを弁明いたします。二お調べになればわかるはずですが、わたしが礼拝をしにエルサレムに上ってから、まだ十二日そこそこのにしかありません。三そして、宮の内でも、会堂内でも、あるいは市内でも、わたしがだれかと争論したり、群衆を煽動したりするのを見たものはありませんし、三今わたしを訴え出ていることについて、閣下の前に、その証拠をあげうるものはありません。四ただ、わたしはこの事は認めます。わたしは、彼らが異端だとしてゐる道にしたがって、わたしたちの先祖の神に仕え、律法の教えるところ、また預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じ、五また、

正しい者も正しくない者も、やがてよみがえるとの希望を、神を仰いでいだいてゐるものです。この希望は、彼ら自身も持っているのです。六わたしはまた、神に対しまた人に対して、良心に責められることのないように、常に努めています。七さてわたしは、幾年ぶりに帰ってきて、同胞に施しをし、また、供え物をしていました。八そのとき、彼らはわたしに宮できよめを行つてゐるのを見ただけであつて、群衆もいず、騒動もなかったのです。九ところが、アジャからきた数人のユダヤ人が――彼らが、わたしに対して、何かとがめ立てをすることがあつたなら、よろしく閣下の前にきて、訴えるべきでした。一〇あるいは、何かわたしに不正なことがあつたなら、わたしが議会の前に立つてゐた時、彼らみずから、それを指摘すべきでした。三ただ、わたしは、彼らの中に立つて、『わたしは、死人のよみがえりのことで、きよう、あなたがたの前でさばきを受けてゐるのだ』と叫んだだけのことです」。

三ここでベリクスは、この道のことを相当わきまえていたので、「千卒長ルシヤが下つて来るのを待つて、おまえたたちの事件を判決することにする」と言つて、裁判を延期した。三そして百卒長に、パウロを監禁するように、しかし彼を寛大に取り扱い、友人らが世話をするのを止めないやうにと、命じた。

二四数日たつてから、ベリクスは、ユダヤ人である妻ド

ルシラと一緒にきて、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰のことを、彼から聞いた。二五そこで、パウロが、正義、節制、未来の審判などについて論じていると、ペリクスは不安を感じてきて、言った、「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」。二六彼は、それと同時に、パウロから金をもらいたい下ごころがあつたので、たびたびパウロを呼び出しては語り合つた。

二七さて、二か年たった時、ボルキオ・フェストが、ペリクスと交代して任についた。ペリクスは、ユダヤ人の歓心を買おうと思つて、パウロを監禁したままにしておいた。

## 第二章

一さて、フェストは、任地に着いてから三日の後、カイザリヤからエルサレムに上つたところ、祭司長たちやユダヤ人の重立った者たちが、パウロを訴えて、三彼をエルサレムに呼び出すよう取り計らつていただきたく、しきりに願つた。彼らは途中で待ち伏せして、彼を殺す考えであつた。四ところがフェストは、パウロがカイザリヤに監禁してあり、自分もすぐそこへ帰ることになつてゐると答え、五そして言つた、「では、もしあの男に何か不都合なことがあるなら、おまえたちのうちの有力者らが、わたしと一緒に下つて行つて、訴えるがよからう」。

六フェストは、彼らのあいだに八日か十日ほど滞在した

後、カイザリヤに下つて行き、その翌日、裁判の席について、パウロを引き出すように命じた。七パウロが姿をあらわすと、エルサレムから下つてきたユダヤ人たちが、彼を取りかこみ、彼に対してさまざまの重い罪状を申し立てたが、いずれもその証拠をあげることはできなかった。八パウロは「わたしは、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、なんら罪を犯したことはない」と弁明した。九ところが、フェストはユダヤ人の歓心を買おうと思つて、パウロにむかつて言つた、「おまえはエルサレムに上り、この事件に関し、わたしからそこで裁判を受けることを承知するか」。一〇パウロは言つた、「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしはこの法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。二もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します」。三そこでフェストは、陪席の者たちと協議したうえ答えた、「おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザルのところに行くがよい」。

四数日たった後、アグリッパ王とベルニケとが、フェストに敬意を表するため、カイザリヤにきた。五ふたり

は、そこに何日間も滞在していたので、フェストは、パウロのことを王に話して言った、「ここに、ペリクスが囚人として残して行つたひとりの男がいる。二五 わたしがエルサレムに行った時、この男のことを、祭司長たちやユダヤ人の長老たちが、わたしに報告し、彼を罪に定めるようにと要求した。一六 そこでわたしは、彼らに答えた、『訴えられた者が、訴えた者の前に立つて、告訴に対し弁明する機会を与えられない前に、その人を見放してしまふのは、ローマ人の慣例にはないことである。』二七 それで、彼らがここに集まってきた時、わたしは時をうつつさず、次の日に裁判の席について、その男を引き出させた。一八 訴えた者たちは立ち上がったが、わたしが推測していたような悪事は、彼について何一つ申し立てはしなかった。一九 ただ、彼と争ひ合っているのは、彼ら自身の宗教に關し、また、死んでしまったのに生きているとパウロが主張しているイエスなる者に関する問題に過ぎない。二〇 これらの問題を、どう取り扱ってよいかわからなかつたので、わたしは彼に、『エルサレムに行つて、これらの問題について、そこでさばいてもらいたくはないか』と尋ねてみた。三〇 ところがパウロは、皇帝の判決を受ける時まで、このまま自分をとどめておいてほしいと言うので、カイザルに彼を送りとどける時までとどめておくようにと、命じておいた。三一 そこで、アグリッパがフェストに「わたしも、その人の言い分を聞いて見た

い」と言つたので、フェストは、「では、あす彼から聞きとるようにしてあげよう」と答えた。

三二 翌日、アグリッパとベルニケとは、大いに威儀をととのえて、千卒長たちや市の重立った人たちと共に、引見所にはいつてきた。すると、フェストの命によって、パウロがそこに引き出された。二六 そこで、フェストが言つた、「アグリッパ王、ならびにご臨席の諸君。ごらんになつてゐるこの人物は、ユダヤ人たちがこぞつて、エルサレムにおいても、また、この地においても、これ以上、生かしておくべきでないと叫んで、わたしに訴え出ている者である。二五 しかし、彼は死に当ることは何もしてゐないと、わたしは見ているのだが、彼自身が皇帝に上訴すると言ひ出したので、彼をそちらへ送ることに決めた。二六 ところが、彼について、主君に書きおくる確かなものが何もないので、わたしは、彼を諸君の前に、特に、アグリッパ王よ、あなたの前に引き出して、取調べをしたのち、上書すべき材料を得ようと思う。二七 囚人を送るのに、その告訴の理由を示さないうことは、不合理だと思えるからである」。

第二十六章 アグリッパはパウロに、「おまえ自身のことを話してもよい」と言つた。そこでパウロは、手をさし伸べて、弁明を始めた。

三三 アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きよう、あなたの前で弁明するこ



とになったのは、わたしのしあわせに思うところであり  
ます。<sup>三</sup>あなたは、ユダヤ人のあらゆる慣例や問題を、よ  
く知り抜いておられるかたですから、わたしの申すこと  
を、寛大な心で聞いていただきたいのです。

<sup>四</sup>さて、わたしは若い時代には、初めから自国民の中で、  
またエルサレムで過ごしたのですが、そのころのわたし  
の生活ぶりは、ユダヤ人がみんなよく知っているとこ  
ろです。<sup>五</sup>彼らはわたしを初めから知っているので、証言  
しようと思えばできるのですが、わたしは、わたしたち  
の宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として  
の生活をしていたのです。<sup>六</sup>今わたしは、神がわたした  
ちの先祖に約束なさった希望をいだいてゐるために、裁  
判を受けてゐるのであります。<sup>七</sup>わたしたちの十二の部  
族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得ようと望  
んでゐるのです。王よ、この希望のために、わたしはユ  
ダヤ人から訴えられています。<sup>八</sup>神が死人をよみがえら  
せるということが、あなたがたには、どうして信じられ  
ないことと思えるのでしょうか。

<sup>九</sup>わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆  
らって反対の行動をすべきだと、思っていました。<sup>一〇</sup>そ  
してわたしは、それをエルサレムで敢行し、祭司長たち  
から権限を与えられて、多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、  
彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。  
<sup>一一</sup>それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰

して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼  
らに對してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、  
迫害の手をのばすに至りました。

<sup>一二</sup>こうして、わたしは、祭司長たちから権限と委任と  
を受けて、ダマスコに行ったのですが、<sup>一三</sup>王よ、その途  
中、真昼に、光が天からさして来るのを見ました。それ  
は、太陽よりも、もっと光り輝いて、わたしと同行者た  
ちとをめぐり照しました。<sup>一四</sup>わたしたちはみな地に倒れ  
ましたが、その時ヘブル語でわたしにこう呼びかける声  
を聞きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害する  
のか。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである』。  
<sup>一五</sup>そこで、わたしが『主よ、あなたはどなたですか』と  
尋ねると、主は言われた、『わたしは、あなたが迫害して  
ゐるイエスである。』<sup>一六</sup>さあ、起きあがって、自分の足で  
立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわ  
たしに会った事と、あなたがたに現れて示そうとしている事  
とをあかしし、これを伝える務に、あなたを任じるため  
である。<sup>一七</sup>わたしは、この国民と異邦人との中から、あな  
たを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、  
<sup>一八</sup>それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔  
の支配から神のみもとへ歸らせ、また、彼らが罪のゆる  
しを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々  
に加わるためである』。

<sup>一九</sup>それですから、アグリッパ王よ、わたしは天よりの

啓示にそむかず、<sup>二〇</sup>まず初めにダマスコにいる人々に、それからエルサレムにいる人々、さらにユダヤ全土、ならびに異邦人たちに、悔い改めて神に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようと、説き勧めました。  
<sup>三</sup>そのために、ユダヤ人は、わたしを宮で引き捕えて殺そうとしたのです。<sup>三</sup>しかし、わたしは今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモーセが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べてきました。  
<sup>三</sup>すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人の中から最初によりみがえって、この国民と異邦人ともに、光を宣べ伝えるに至ることを、あかししたのです。  
<sup>二四</sup>パウロがこのように弁明をしていると、フェストは大声で言った、「パウロよ、おまえは気が狂っている。博學が、おまえを狂わせている」。<sup>二五</sup>パウロが言った、「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじめな真実の言葉を語っているだけです。  
<sup>二六</sup>王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、卒直に申し上げているのです。それは、片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王が見のがされたことはないと思います。<sup>二七</sup>アグリッパ王よ、あなたは預言者を信じますか。信じておられると思います」。<sup>二八</sup>アグリッパがパウロに言った、「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしてい

る」。<sup>二九</sup>パウロが言った、「説くことが少しであろうと、多くであろうと、わたしが神に祈るのは、ただあなたただけでなく、きょう、わたしの言葉を聞いた人もみな、わたしのようになって下さることです。このような鎖は別ですが」。

<sup>三〇</sup>それから、王も総督もベルニケも、また列席の人々も、みな立ちあがった。<sup>三一</sup>退場してから、互に語り合っていた、「あの人は、死や投獄に当るようなことをしてはいない」。<sup>三二</sup>そして、アグリッパがフェストに言った、「あの人は、カイザルに上訴していなかったら、ゆるされたであろうに」。

## 第二十七章

「さて、わたしたちが、舟でイタリヤに行くことが決まった時、パウロとそのほか数人の囚人とは、近衛隊の百卒長ユリアスに託された。<sup>二</sup>そしてわたしたちは、アジャ沿岸の各所に寄港することになって、いるアドラミテオの舟に乗り込んで、出帆した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。<sup>三</sup>次の日、シドンに入港したが、ユリアスは、パウロを親切に取り扱い、友人をおとずれてかнтаいを受けることを、許した。<sup>四</sup>それからわたしたちは、ここから船出したが、逆風にあったので、クプロの島かげを航行し、<sup>五</sup>キリキヤとパンフリヤの沖を過ぎて、ルキヤのミラに入港した。<sup>六</sup>そこに、イタリヤ行きのアレキサンドリヤの舟があったので、百卒長は、わたしたちをその舟に乗り込ませた。





ころ、二十ひろであることがわかった。それから少し進んで、もう一度測つてみたら、十五ひろであつた。二九わたしたちが、万一暗礁に乗り上げては大変だと、人々は気づかつて、ともから四つのいかりを投げおろし、夜の明けのを待ちわびていた。三〇その時、水夫らが舟から逃げ出そうと思つて、へさきからいかりを投げおろすと見せかけ、小舟を海におろしていたので、三一パウロは、百卒長や兵卒たちに言つた、「あの人たちが、舟に残つていなければ、あなたがたは助からない」。三二そこで兵卒たちは、小舟の綱を断ち切つて、その流れて行くままに任せた。

三三夜が明けかけたころ、パウロは一同の者に、食事をするように勧めて言つた、「あなたがたが食事もせずに見張りを続けてから、何も食べないで、きょうが十四日目に当る。三四だから、いま食事を取ることをお勧めする。それが、あなたがたを救うことになるのだから。たしかに髪の毛ひとつしでも、あなたがたの頭から失われることはないであらう」。三五彼はこう言つて、パンを取り、みんなの前で神に感謝し、それをさいて食べはじめた。三六そこで、みんなの者も元気づいて食事をした。三七舟にいたわたしたちは、合わせて二百七十六人であつた。三八みんなの者は、じゅうぶんに食事をした後、穀物を海に投げすてて舟を軽くした。

三九夜が明けて、どこの土地がよくわからなかったが、

砂浜のある入江が見えたので、できれば、それに舟を乗り入れようということになった。四〇そこで、いかりを切り離して海に捨て、同時にかじの綱をゆるめ、風に前の帆をあげて、砂浜にむかつて進んだ。四一ところが、潮流の流れ合う所に突き進んだため、舟を浅瀬に乗りあげてしまつて、へさきがめり込んで動かなくなり、その方は激浪のためにこわされた。四二兵卒たちは、囚人らが泳いで逃げるおそれがあるので、殺してしまおうと図つたが、四三百卒長は、パウロを救いたいと思つところから、その意図をしりぞけ、泳げる者はまず海に飛び込んで陸に行き、四四その他の者は、板や舟の破片に乗つて行くように命じた。四五こうして、全部の者が上陸して救われたのであつた。

第二十八章 一わたしたちが、こうして救われてか

らわかつたが、これはマルタと呼ばれる島であつた。二土地の人々は、わたしたちに並々ならぬ親切をあらわしてくれた。すなわち、降りしきる雨や寒さをしのぐために、火をたいてわたしたち一同をねぎらつてくれたのである。三そのとき、パウロはひとかかえの柴をたねて火にくべたところ、熱気のためにまむしが出てきて、彼の手にかみついた。四土地の人々は、この生きものがパウロの手からぶら下がっているのを見て、互に言つた、「この人は、きつと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」。

五ところ、パウロは、まむしを火の中に振り落して、なんの害も被らなかつた。六彼らは、彼が間もなくはれ上がるか、あるいは、たちまち倒れて死ぬだろうと、様子うかがっていた。しかし、長い間うかがっていても、彼の身になんの変ったことも起らないのを見て、彼らは考えを変えて、「この人は神様だ」と言い出した。

七さて、その場所の近くに、島の首長、ポプリオという人の所有地があつた。彼は、そこにわたしたちを招待して、三日のあいだ親切にもてなしてくれた。八たまたま、ポプリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床についていた。そこでパウロは、その人のところにはいつて行って祈り、手を彼の上においていやってやった。九このことがあつてから、ほかに病氣をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってきて、みないやされた。一〇彼らはわたしたちを非常に尊敬し、出帆の時には、必要な品々を持ってきてくれた。

二三か月たった後、わたしたちは、この島に冬ごもりをしていたデオスクリの船飾りのあるアレキサンドリヤの舟で、出帆した。二三そして、シラクサに寄港して三日のあいだ停泊し、二四そこから進んでレギオンに行った。それから一日おいて、南風が吹いてきたのに乗じ、ふつか目にポテオリに着いた。二五そこで兄弟たちに会い、勧められるまま、彼らのところに七日間も滞在した。それからわたしたちは、ついにローマに到着した。二六ところ

が、兄弟たちは、わたしたちのことを聞いて、アピオ・ポロおよびトレス・タベルネまで出迎えてくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し勇み立った。

一六わたしたちがローマに着いた後、パウロは、ひとりの番兵をつけられ、ひとりで住むことを許された。

一七三日たってから、パウロは、重立ったユダヤ人たちを招いた。みんなの者が集まったとき、彼らに言った、「兄弟たちよ、わたしは、わが国民に対しても、あるいは先祖伝来の慣例に対しても、何一つそむく行為がなかったのに、エルサレムで囚人としてローマ人たちの手に引き渡された。一八彼らはわたしを取り調べた結果、なんら死に当る罪状もないので、わたしを釈放しようと思つたのであるが、ユダヤ人たちがこれに反対したため、わたしはやむを得ず、カイザルに上訴するに至つたのである。しかしわたしは、わが同胞を訴えようなどとしてゐるのではない。二〇こういうわけで、あなたがたに会って語り合いたいと願つていた。事実、わたしは、イステルのいだいてゐる希望のゆえに、この鎖につながれてゐるのである。二一そこで彼らは、パウロに言った、「わたしたちは、ユダヤ人たちから、あなたについて、なんの文書も受け取つていないし、また、兄弟たちの中からここにきて、あなたについて不利な報告をしたり、悪口を言つたりした者もなかつた。二二わたしたちは、あなたの考へてゐることを、直接あなたから聞くのが、正し

いことだと思<sup>おも</sup>っている。実は、この宗派<sup>しゅうはい</sup>については、いたるところで反対<sup>はんたい</sup>のあることが、わたしたちの耳<sup>みみ</sup>にもはいつている」。

三三そこで、日を定<sup>さだ</sup>めて、大ぜいの人<sup>ひと</sup>が、パウロの宿<sup>やど</sup>につめかけてきたので、朝<sup>あさ</sup>から晩<sup>ばん</sup>まで、パウロは語<sup>かた</sup>り続<sup>つづ</sup>け、神<sup>かみ</sup>の国<sup>くに</sup>のことをあかしし、またモーセの律法<sup>りつぽう</sup>や預言者<sup>よげんしや</sup>の書<sup>しよ</sup>を引<sup>ひ</sup>いて、イエスについて彼<sup>かれ</sup>らの説得<sup>せつとく</sup>につとめた。ある者はパウロの言<sup>い</sup>うことを受<sup>う</sup>けいれ、ある者は信<sup>しん</sup>じようとしなかった。三五互<sup>たがい</sup>に意見<sup>いけん</sup>が合<sup>あ</sup>わなくて、みんなの者<sup>もの</sup>が帰<sup>かえ</sup>ろうとしていた時<sup>とき</sup>、パウロはひとこと述<sup>の</sup>べて言<sup>い</sup>った、「聖霊<sup>せいれい</sup>はよくも預言者<sup>よげんしや</sup>イザヤによつて、あなたがたの先祖<sup>せんぞ</sup>に語<sup>かた</sup>ったものである。

三六『この民<sup>たみ</sup>に行<sup>い</sup>つて言<sup>い</sup>え、

あなたがたは聞<sup>き</sup>くには聞<sup>き</sup>くが、決<sup>けつ</sup>して悟<sup>さと</sup>らない。  
見るには見<sup>み</sup>るが、決<sup>けつ</sup>して認<sup>みと</sup>めない。

三七この民<sup>たみ</sup>の心<sup>こころ</sup>は鈍<sup>にぶ</sup>くなり、

その耳<sup>みみ</sup>は聞<sup>きこ</sup>えにくく、  
その目<sup>め</sup>は閉<sup>と</sup>じている。  
それは、彼<sup>かれ</sup>らが目<sup>め</sup>で見<sup>み</sup>ず、  
耳<sup>みみ</sup>で聞<sup>きこ</sup>かず、  
心<sup>こころ</sup>で悟<sup>さと</sup>らず、悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めて  
いやされることがないためである』。

三八そこで、あなたがたは知<sup>し</sup>つておくがよい。神<sup>かみ</sup>のこの救<sup>すく</sup>いの言葉<sup>ことば</sup>は、異邦人<sup>いほうじん</sup>に送<sup>おく</sup>られたのだ。彼<sup>かれ</sup>らは、これに聞<sup>き</sup>きたがうであろう。『三九パウロがこれらのことを述<sup>の</sup>べ終<sup>おほ</sup>ると、ユダヤ人<sup>じん</sup>らは、互<sup>たがい</sup>に論<sup>ろん</sup>じ合<sup>あ</sup>いながら帰<sup>かえ</sup>つて行<sup>い</sup>った。』

四〇パウロは、自<sup>し</sup>分の借<sup>か</sup>りた家<sup>いえ</sup>に満<sup>まん</sup>二年<sup>ねん</sup>のあいだ住<sup>す</sup>んで、たずねて来<sup>く</sup>る人々<sup>ひとびと</sup>をみな迎<sup>むか</sup>え入<sup>い</sup>れ、三十一はばかりず、また妨<sup>さまた</sup>げられることもなく、神<sup>かみ</sup>の国<sup>くに</sup>を宣<sup>のたま</sup>べ伝<sup>つた</sup>え、主<sup>しゆ</sup>イエス・キリストのことを教<sup>おし</sup>えつづけた。

四二三日式<sup>さんじつしき</sup>で、パウロは、重立<sup>じゅうたつ</sup>の式<sup>しき</sup>で人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
四九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五一パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五二パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
五九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六一パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六二パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
六九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七一パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七二パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
七九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八一パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八二パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
八九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九一パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九二パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九三パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九四パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九五パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九六パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九七パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九八パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
九九パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、  
一〇〇パウロは、人々<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>え、